



子どもの 保護と安全 食料保障： 子どもの

人道的環境に
おける関連性の
検証

この検証は、プラン・インターナショナルとの提携の下で、Global Child Protection Area of Responsibilityが主導する人道的環境における子どもの保護と食料安全保障の関係者間の連携を強化するための、世界的取り組みの一環として、Global Food Security Clusterと連携して、子どもの保護と食料安全保障への対応を統合するため、強化された知識と技術的なツールを人道支援専門家に提供することを目的に実施された。この検証で得られた知見は、子どもの保護と食の安全保障のクラスター調整メカニズムやそのパートナーに直接提供される技術支援や能力強化だけでなく、プログラムや提唱ツールの開発にも活用される。この取り組みの詳細については、[子どもの保護\(CP\)と食料安全保障\(FS\)の専門家がどのように連携しているか](#)を参照されたい。

この検証は、教育、保健、キャンプ調整、キャンプ管理、食料安全保障など、部門を超えた効果的な協力方法を促進するための、子どもの保護とその他の世界的な人道アクターの広範な努力の一環である。この取り組みやその他の検証の詳細については、[「Working Across Sectors for Children's Protection」](#)を参照されたい。



耕作する前の土地で作物を洗うネパールの女性。

目次

01 はじめに	2
02 子どもの食料不安体験	5
03 食料不安に関連するCP リスク	10
精神衛生と心理社会的苦痛	12
家族離散	14
ネグレクト	15
身体的・精神的暴力	16
児童労働	17
武装勢力および武装グループによ る徴集と利用	19
危険と負傷	20
早すぎる結婚	21
親密なパートナーからの暴力(IPV)	22
性的搾取	23
性暴力	24
その他の問題	24
04 CPとFSの専門家が どのように連携してい るか	25
05 議論	32
06 提言	34
参考文献	40

用語集

AAP	影響を受けた人びとへの説明責任
CFS	子どもに配慮した空間
CHH	子どもが世帯主となっている家庭
COVID-19	コロナウイルス感染症
CP	子どもの保護
CP AoR	子どもの保護の責任の領域
CVA	現金およびバウチャーによる支援
EFSA	緊急食料安全保障評価
FCS	食料摂取スコア
FEWSNET	飢餓早期警戒システムネットワーク
FIES	食料不安経験尺度
FS	食料安全保障
GBV	ジェンダーに基づく暴力
HFIAS	世帯食料不安定性アクセススケール
ICCG	クラスター間調整グループ
IDP	国内避難民
IGA	収入創出活動
IPV	親密なパートナーからの暴力
JAM	合同評価ミッション
MHPSS	精神衛生および心理社会的支援
PDM	配給後の監督
PSEAH	性的搾取、虐待、ハラスメントの防止
PSS	心理社会的支援
RCT	無作為化比較試験
SGBV	性とジェンダーに基づく暴力
UASC	大人に付き添われていない子どもや主たる養育者と離ればなれになった子ども
UNHCR	国連難民高等弁務官事務所
VAM	脆弱性分析マッピング
VSLA	村の貯蓄貸付組合
WFP	世界食料計画

ハイチで水汲みをする8歳の子ども。
©PLAN INTERNATIONAL



01

はじめに

主な定義

FS 誰もが、活動的で健康的な生活のために、食生活上のニーズや食の嗜好を満たす、十分に安全な栄養価の高い食品を、身体・社会・経済的にいつでも入手できるようにすること。

CP 子どもへの暴力、虐待、ネグレクト、搾取の防止と対応を目的としたすべての活動。

食料不安の世界的概況¹

2021年

世界で **±23億人** が、中・重度の食料不安に陥っている



女性は依然として男性よりも **4%** 以上食料不安の割合が高い

世界中で

31.9%

の女性が中・重度の食料不足であった



2020年、5歳未満の子どもうち

±4,500万人が衰弱し

±14,900万人が発育不良

衰弱は子どもの死亡リスクを最大12倍高める

CPリスクの世界的概況²

過去1年間

±10億人

の子どもが(子どもの2人に1人)、身体的・性的・精神的暴力やネグレクトを経験している。



±1億2,000万人

の女の子が、20歳までに何らかの性的接触を強要された経験がある。

1/3 の子ども

が感情的暴力の影響を受けている



1/4 の子ども

が親密なパートナーからの暴力(IPV)を経験した母親と暮らしている

1. FAO, IFAD, UNICEF, WFP and WHO. 2022. *The State of Food Security and Nutrition in the World 2022. Repurposing food and agricultural policies to make healthy diets more affordable.* Rome, FAO.

2. WHO, Global status report on preventing violence against children, Geneva, 2020. UNICEF, Hidden in plain sight: A statistical analysis of violence against children, New York: United Nations Children's Fund; 2014.

食料などの基本的ニーズに応えていないことは、子どもに有害な影響を及ぼす普遍的な危険因子だと認識されている。

主に高所得国の調査で、食料不安が子どもに対する暴力と関連することがわかっている。ある調査では、幼い子どもが家庭で暴力にさらされる割合は、食料がある家庭と比較して、持続的な食料不安を経験している家庭の方が6倍高かった³。食料不安がCPリスクに与える影響は状況により異なり、文化的・ジェンダー的規範、政府の政策、社会的公平性、社会的安全メカニズムの利用可能性とアクセス、家庭のレジリエンスの影響を受ける。人道的な環境では、避難や武力紛争も、食料不安がCPに与える影響に影響する。

人道的環境における食料不安とCPリスクの関連性について、文書化された分析はほとんど行われていない⁴。世界的な食料不安の高まりが続き、FSプログラムが資金不足に直面する中、早すぎる結婚、児童労働、身体的・精神的暴力、性暴力など、人道的環境におけるCPリスクは一層高まると考えられる。食料不安は、子どもの栄養、健康、教育の成果を更に害することになり、ひいては子どもの保護と幸福にも影響する。

多くの人道的環境では、FSプログラムは多くの家族やコミュニティに広く行き渡り、特権的なアクセスを持っている。協力し合い、食料不安とCPリスクがどう関連しているかをよく理解することで、人道支援アクターは以下のことが可能となる。

- CPリスクの予防、軽減、対応のための戦略的決定を行う；
- 子どもの保護と幸福を拡大するために、FSのプログラムを活用する；
- 危害を加えるリスクを最小化する。

制限事項

この検証は体系的なものではなく、現存するすべての証拠を網羅していない。多くのCPやFS組織は、文書化しなかったか、あるいは現在進行中の人道的対応に従事していたためと思われるが、文書化の要請に応じることができなかった。人道的で脆弱な状況を調査した学術的な情報源は限られていた。その結果、調査結果を拡大するために、人道的でない中低所得の状況にも調査の範囲を広げた。

「飢餓」のような用語は慣用的であることが多く、食料不安というよりも、苦痛や貧困を表現する方法として、個別に使用されている可能性がある。検証で用いたすべての情報源が、食料摂取スコア(FCS: Food Consumption Score)、食料不安の経験尺度(FIES: food insecurity experience scale)、世帯食料不安定性アクセススケール(HFIAS: Household food insecurity access scale)等の定量的ツールを用いて食料不安を測定していない⁷。その結果、証拠は食料不安のある場所に住む参加者を対象とした一次調査から得られたものであるが、調査結果の一部は、貧困等のCPリスクの他の要因と重複する可能性がある。

CPアクターの間では、他の部門と合同で統合された方法で活動することは、子どもの総合的なニーズに取り組むための重要な戦略であると認識されている⁵。FSアクターはまた、その任務の一環として、子どもを含む被災者の保護の効果を上げるよう努めている⁶。

目的

この検証は、食料不安とCPの関連性、そして人道的な状況においてCPとFSのアクターがどう協力しているかを概観することを目的としている。検証では、2つの重要な質問が設定された。

- ① 食料不安はCPリスクにどんな影響を与えるのか
- ② CPの成果を上げるために、CPとFSのアクターはどう協力し、どんな成果があったのか

調査方法

証拠検証は2022年2～4月に実施され、学術文献と灰色文献(伝統的な商業出版又は学術出版の流通ルートに乗らない出版物や学術文献のこと)から抽出された。学術文献は、包含基準と除外基準を用いてフィルタリングしたキーワード検索により特定した。特定された文献は、追加的な文献を探すための参考文献として使用された。灰色文献は、CPとFSに特化した組織のウェブサイトを検索して特定し、また子どもの保護の責任の領域(CP AoR)と食料安全保障クラスターのメーリングリストを通じて送られた文書募集を通じて要請した。デスクレビューの結果を補完し、提言に反映させるため、世界および国レベルで活動するCP、保護、FSのアクターに、半構造化主要情報提供者(KI)インタビューを10回実施した。

3. Jackson, Dylan B., et al, "Food Insecurity and Violence in the Home: Investigating Exposure to Violence and Victimization Among Preschool-Aged Children," Health Education & Behavior, vol. 45, no. 5, 2018, pp. 756–63.

4. The Alliance for Child Protection in Humanitarian Action, Understanding Risk and Protective Factors in Humanitarian Crises: Towards a Preventive Approach to Child Protection in Humanitarian Action.

5. The Alliance for Child Protection in Humanitarian Action, Minimum Standards for Child Protection in Humanitarian Action, 2019.

6. WFP, Protection and Accountability Policy, 2020.

7. Ndungu, Jane et al, Afghan Women's Use of Violence Against Their Children and Associations with IPV, Adverse Childhood Experiences and Poverty; A Cross-Section and Structural Equation Modelling Analysis," International journal of environmental research and public health, 2021-07-27, Vol.18 (15), p.7923.

02

子どもの 食料不安 体験

家族とご飯を分け合う4歳の女の子(ブルキナファソ)。
©PLAN INTERNATIONAL

子どもの食料不安体験は、その年齢、ジェンダー、ニーズ、発達上の脆弱性、主体性、家族内における地位のため、大人とは本質的に異なる。FSは、入手可能性、アクセス、活用、安定性という4つの柱によって支えられている。子どもは、これら4つの柱すべてにおいて役割を果たし、その影響を受ける。

表1: 子どもとFSの4つの柱

01

入手可能性

食料の入手可能性は、FSの「供給面」に対処するものであり、食料生産レベル、在庫状況、貿易、および食料援助によって決定される。



子どもは食料生産の一翼を担っている。

世界全体では、5～17歳の子ども労働者の60%が、農業、漁業、養殖業、林業、畜産業を含む農業に従事している。

危険な仕事に従事している5～17歳の子どもの約59%が農業に従事している⁸。

世界の大部分では、女性と女の子が主要な農業の担い手であり、食料の生産者である。

彼女たちは、土地の所有権、生産活動、技術、金融サービスへのアクセスが少ないことが多い。

02

アクセス

食料へのアクセスとは、安全で栄養価の高い食料を調達する経済的・物理的能力を指す。国や国際レベルで十分な食料が供給されても、家庭レベルのFSが保証されるわけではない。



子どもは、家族のために市場で食料を購入する責任を負い、食料価格の知識を持っている可能性がある。

また、現物支給や学校給食プログラムなど、家族に代わって食料援助を集める役割を担うこともある。

子ども世帯主となっている家庭(CHH)、大人に付き添われていない子どもや主たる養育者と離ればなれになった子ども(UASC)、その他の子どもは、ネグレクト、登録慣行、差別のために、食料や食料援助にアクセスする際に障壁に直面する可能性がある。

8. ILO, Child labour in agriculture, <https://www.ilo.org/ipec/areas/Agriculture/lang--en/index.htm>

03

活用

食物の活用とは、食物が個人に到達した後の代謝のことであり、つまり私たちの身体が摂取した食物のエネルギーをどう活用するかということである。活用は、衛生環境、清潔な水などの食品の準備、加工、調理や健康管理に影響される。摂食習慣や食料の世帯内配分も食料活用の要因である。



幼い子どもや障害のある子どもは、食事の支度を保護者や姉妹に頼っている場合がある。

女の子、既婚の女の子、UASCを含む子どもは、家庭内で資源がどう分配されるかについて、ほとんど発言権がないかもしれない。

女の子や思春期の女の子は、食料の準備、加工、調理を担当することが多い。これには水や薪を集めることも含まれる。

女の子、特に既婚の女の子は、家族全員が食事を済ませた後、食事をすることがある。中には、女の子が差別を受け、男の子より授乳時間が短く、与えられる食事が少なく、劣悪な場合もある⁹。

04

安定性

これは、「入手可能性」、「アクセス」、「活用」が長期的に安定していることを示す。つまり、これらは時間とともに一定であるべきで、周期的な出来事や、経済・気候危機のような突発的な衝撃で変化してはならない。



不安定な時期には、子どもは食事を減らしたり、食生活を変える、近所の人と食べる、幼い子どもに食べ物を譲るなどの対処法をとることがある。

子どもは、家族のFSを支えるために、食料の生産と準備を含め、ますます責任を負うようになるかもしれない。

不安定さにより、児童労働、早すぎる結婚、性的搾取、武装勢力や武装集団による徴用や利用など、極端な対処メカニズムを強いられることもある。

9. Hathi, Payal et al, "When women eat last: Discrimination at home and women's mental health." PloS one vol. 16,3 e0247065. 2 Mar. 2021.



10歳と12歳の兄妹が農園でインゲン豆を収穫する(フィリピン)。

©PLAN INTERNATIONAL

既存の文献によれば、幼い子どもも思春期の若者も、FS、特に食事の多様性は、彼らの幸福にとって不可欠であり、「良い人生」や「うまくやっていく」ことの一部だと考えている。

- エチオピアの食料不安と干ばつの影響を受けた地域を対象とした質的調査では、子どもは良い生活を送っている他の子どもについて、食べている食べ物の種類、食事の多様性、バランスの取れた食事をしているか、栄養状態などから説明した。
- インドで5～19歳の地方の子どもを対象に行われた混合研究でも、子どもが考える良い生活とは、十分な食事と多様な食生活であることが明らかになっている¹⁰。
- マラウイの思春期の若者は、安定して多様な食生活を得ることが、教育と並んで重要な願望のひとつであると報告している¹¹。

子どもは食料不安に直面すると、食事の量を減らし、食事を抜き、低品質の食品を食べるなど、さまざまな対処方法をとる。幼い子どもは、年上の兄弟や保護者によって家庭の食料不安の影響から守られているかもしれないが、年長の思春期の若者は飢餓を経験するリスクが高いかもしれない。

- ベネズエラの子どものは、食べる量を減らし、親戚や知人に助けを求め、場合によってはゴミの中から食べ物を探すなどの戦略を報告した¹²。
- シリアの成人保護者は、子どものニーズを優先するために食事を抜くと報告している¹³。
- ベネズエラの年長の子どもは、自身の食料摂取を犠牲にすることで、弟妹が食料不足に陥らないように守っていると報告した。
「私はあまり食べません。妹と一緒に食事をするとき、食べ物が少ないときは、妹に多めにあげます。自分よりも妹に少し多めに出します」
女の子、15歳、ベネズエラ¹⁴
- ナイジェリアの思春期の女の子は、幼い子どもに先に食べさせ、年上の思春期の若者や大人が残ったものを食べることで、限られた食料に対処していると報告した。

「幼い子は食べ、年上の子は水を飲んで寝る」

思春期の女の子、18歳、ナイジェリア¹⁵

10. Aurino, Elisabeth et al, "Food prices were high, and the dal became watery". Mixed-method evidence on household food insecurity and children's diets in India, World Development, Volume 111, 2018, Pages 211-224.

11. Save the Children, CARE, USAID. Titukulane Youth Needs Assessment: Finding sources of connection, learning, and earning, May 2021.

12. Bernal, Jennifer et al, Children Live, Feel, and Respond to Experiences of Food Insecurity That Compromise Their Development and Weight Status in Peri-Urban Venezuela, The Journal of Nutrition, Volume 142, Issue 7, July 2012, Pages 1343-1349.

13. Nabulsi, Dana et al. "Voices of the Vulnerable: Exploring the Livelihood Strategies, Coping Mechanisms and Their Impact on Food Insecurity, Health and Access to Health Care Among Syrian Refugees in the Beqaa Region of Lebanon." PLoS one 15.12 (2020).

14. Bernal, Jennifer, et al, Children Live, Feel, and Respond to Experiences of Food Insecurity That Compromise Their Development and Weight Status in Peri-Urban Venezuela, The Journal of Nutrition.

15. Plan International. Adolescent Girls in Crisis: Voices from the Lake Chad Basin, 2018.

16. Kuku, Oluyemisi, et al, Differences in food insecurity between adults and children in Zimbabwe, Food Policy, Volume 36, Issue 2, 2011, Pages 311-317.

UASCのような脆弱な子どもは、同じ地域で暮らす住む他の子どもと同じ保護を受けられない可能性がある。

- ジンバブエの調査では、同じ世帯に住む成人と比べて、子どもは食料不安に見舞われたと報告する割合が低く、幼い子どもほど食料不安から守られている傾向があることがわかった。だが、孤児に分類された子どもは、より高いFSを報告しなかった。つまり、孤児は他の子どもと同等には、食料不安から保護されていないようであった¹⁶。

食料不安がある地域に住む子どもや思春期の若者は、食料不安が自身の選択や機会にどのような影響を与えるかを認識している。年上の思春期の若者は、家族を養うか、自らのニーズを満たすかという圧力を体験する可能性があり、その結果、教育へのアクセスが低下し、児童労働、早すぎる結婚、性的搾取などの慣行へのリスクが高まる(第3部参照)。

- ケニアの干ばつ多発地域の子どもは、干ばつが短期的・長期的に彼らの幸福にどう影響するか、その結果彼らの生活の選択がどう制約を受けるか、そしてそれが女の子と男の子両方の安全と保護にどう影響するかを概念化することができた。彼らは、食料が入手できないことで、援助や学校給食プログラムにどう頼ることになるのか、男の子と女の子が追加的な食料や収入を得るために、どんな戦略を取れるのか、そしてこうした戦略に関連するジェンダー化された保護リスクについて、説明することができた¹⁷。

こうした困難を抱えているものの、家族のFSに貢献している子どもは、主体性を感じていることも報告されている。年上の思春期の若者が自身や家族のFSに関与することで、自信、自尊心、仕事のスキルが向上することもわかった¹⁸。

- チャド湖流域では、思春期の女の子と男の子が、彼らの小規模な生計と家族のFSへの貢献に誇りと達成感を抱いていることを報告した。また、思春期の若者は、起業家としての活動を支援されることへの適性と強い願望を示した¹⁹。

この検証で判明したのは、人道的環境における子どもの食料不安体験は、FSやCPの評価では殆ど把握されていないということだ。

- 子どもの食料不安に関する大半のデータ収集は、5歳未満の子どもの栄養不良の人体測定が中心である。学齢期の子どもと思春期の若者は、FSの文献では「忘れられた集団」とされている²⁰。
- 対処戦略に関する量的データを収集するような監視システムやツールは、一般的に児童労働についてのみ尋ねており、他のCPリスクを特定することはできない。このようなツールは世帯主を対象としており、子どもや思春期の若者自身は関与していない²¹。
- CP評価では通常、「食料不足」が子どもや保護者のストレスの原因になっているかどうかを尋ねるのみである²²。
- 食料危機における一貫した性・年齢別データには、依然としてギャップが存在している²³。



栄養プログラムに参加する母子(ケニア)。
©PLAN INTERNATIONAL

17. Polack E. Child rights and climate change adaptation: voices from Cambodia and Kenya. In: Children in a Changing Climate; 2010.

18. ILO, Child labour in agriculture, <https://www.ilo.org/ipcc/areas/Agriculture/lang--en/index.htm>

19. Plan International. Adolescent Girls in Crisis: Voices from the Lake Chad Basin. 2018.

20. Aurino et al, "Food prices were high, and the dal became watery". Mixed-method evidence on household food insecurity and children's diets in India, World Development.

21. The Alliance for Child Protection in Humanitarian Action. Monitoring Child Protection Within Humanitarian Cash Programmes. 2019

22. Global Protection Cluster, Child Protection Working Group, Child Protection Rapid Assessment Toolkit, 2012.

23. Spears found a Lack of widespread or consistent collection of sex and age disaggregated data in four recent threatened famines (South Sudan, 2013 to present), Yemen (2015 to present), Somalia (2010-2011, 2017), and Nigeria (2009 to present). Spears et al, "Gender, Famine, and Mortality," World Peace Foundation and Feinstein International Center, Occasional Paper #36, December 2021.

JANO プロジェクトに参加する女の子、ランブール(バングラデシュ)。

©PLAN INTERNATIONAL

03

食料不安
に関連す
るCPIリスク

CPはいくつかの点で食料不安の影響を受ける。

食料不安は、子どもや保護者の不健全な精神状態や心理社会的苦痛と関連している。

ストレス、不安、攻撃性の増大は、ネグレクト、身体的・精神的暴力、仲間からの暴力、IPVなど、さまざまな形のCPリスクを誘発する。

子どもや家族に十分な食料がなかったり、食料を買うための十分な資金がなかったりすると、食料を得るために極端な対処法に頼ることがある。

対処メカニズムには、家族離散、児童労働、早すぎる結婚、武装勢力や武装集団による徴用・利用、性的搾取などがある。

子どもやその家族が、食料需要を満たすために食料を生産・探索・調理する際にも、子どもはCPリスクにさらされる可能性がある。

CPリスクには、ネグレクト、児童労働、性暴力、性的搾取、危険や怪我、武装勢力や武装集団による徴用や利用などが含まれる。

食料不安に対処のための介入策は、子どもを保護リスクにさらす可能性がある。

こうした保護リスクの例としては、危険や怪我、心理社会的苦痛、性的搾取、差別がある。



メンタルヘルスと 心理社会的苦痛

不健全な精神状態や心理社会的苦痛とは、子どもやその保護者の直接的・長期的な社会心理的・社会的苦痛のことである。証拠によると、食料不安は、子どもがストレス、不安、悲しみ、恥を感じることにつながり、保護者はストレス、不安、抑うつを感じる可能性がある。

食料不安がメンタルヘルスとウェルビーイングに影響を及ぼすことを示す証拠が世界中で増えている。食料不安は、いくつかの点で、精神衛生を悪化させる可能性がある。食料不足は認知機能に影響を及ぼす可能性がある。社会的儀式を楽しめない、食料に関する知識を共有できない、社会的に容認されない方法で食料を入手するなど、食料不安の社会的影響は、無力感や羞恥心を引き起こす可能性がある。他の調査では、食物のような基本的欲求の剥奪は本質的に有害だという証拠を指摘している²⁴。

- 国を代表する食料不安とメンタルヘルスのデータの世界的な検証では、世界のどの地域でも、食料不安は女性も男性も、より悪いメンタルヘルス指標と関連していることがわかった。食料不安の程度が悪化するにつれて、悲しみ、心配、ストレス、怒りなどのメンタルヘルスも悪化した²⁵。
- エチオピアの都市部やブラジルの地方では、食料不安は、うつ病や不安症の症状が重い確率が3倍高いことと関連している²⁶。

COVID-19の流行は、多くの状況でFSと精神衛生状態を悪化させた。食料不安に陥ったユースにとって、COVID-19の精神衛生および心理社会的影響は特に深刻である。

- ペルー、ベトナム、インドの19～26歳のユースを対象とした調査によると、パンデミック期間中のユースの不安と抑うつの割合は、コミュニティにおけるCOVID-19の感染率が低下するにつれて大幅に改善したが、食料不安を抱えるユースの場合、メンタルヘルスに同様の改善は見られなかった。COVID-19の感染率が2020年の終わりごろに低下しても、ペルーでは食料不安に苛まれるユースの46%が不安や抑うつの症状を訴えていた。ベトナムでは、食料不安に苛まれるユースの不安や抑うつの割合は平均の4倍であった²⁷。



エチオピアの避難キャンプから見える山々を眺める13歳。
©PLAN INTERNATIONAL

今回の検証では、食料不安が人道的な環境における子どものメンタルヘルスとウェルビーイングに与える影響に関する量的調査は確認されなかった。質的研究によると、**食料が入手できないことは子どもにとって心理社会的苦痛の原因であり、ストレス、不安、悲しみ、恥を感じる原因となっている。**

- フィリピンの台風Bopha後の関係機関による迅速アセスメントでは、女の子と男の子がストレスの原因として最も多く報告したのは、食料と避難所へのアクセスが欠如したことだった。子どもたちはまた、農地が被害を受け、家族の生計や収入源が失われることを心配していた。コミュニティ内の保護者にとっても、食料へのアクセスの欠如がストレスの主な原因となっており(29%)、次いで生計の欠如(26%)、シェルターの欠如(21%)であった²⁸。
- ベネズエラの都市周辺部に住む10～17歳の子どもは、食料不安に陥った子どもは苦悩、悲しみ、恥を感じ、泣くなどの反応を示すと報告した。また、他の子どもは、食料不安の子どもがその状況に甘んじていると報告した²⁹。13～17歳の女の子は、もっと食べたくても食べられなかったり、毎日同じものを食べなければならなかったときに、恥を感じると報告する傾向が強かった³⁰。

「最初の数日はとても苦しんだ。新しい国に来たのだから、と自分を慰めました。両親には仕事がない。だから食べ物ももらえない。しかし、弟妹たちは理解しようとせず、大泣きします」

思春期の女の子、13歳、ロヒンギャ難民キャンプ、バングラデシュ³¹

24. Weaver et al, Unpacking the “black box” of global food insecurity and mental health, Social Science & Medicine, Volume 282, 2021.

25. Jones, Andrew D, Food Insecurity and Mental Health Status: A Global Analysis of 149 Countries, American Journal of Preventive Medicine, Volume 53, Issue 2, 2017, Pages 264-273.

26. Weaver et al, Unpacking the “black box” of global food insecurity and mental health, Social Science & Medicine, Volume 282, 2021.

27. Porter, Catherine et al. “The Evolution of Young People’s Mental Health During COVID-19 and the Role of Food Insecurity: Evidence from a Four Low-and-Middle-Income-Country Cohort Study.” Public health in practice (Oxford, England) 3 (2022).

28. UNICEF, Protection Risks for Children As A Result of Typhoon Bopha (Pablo): Inter-Agency Child Protection Rapid Assessment Report, Child Protection Sub-cluster, March 2013.

29. Bernal et al, Children Live, Feel, and Respond to Experiences of Food Insecurity That Compromise Their Development and Weight Status in Peri-Urban Venezuela, The Journal of Nutrition.

30. Bernal et al. “Food Insecurity of Children Increases Shame of Others Knowing They Are Without Food.” The FASEB journal 29.S1 (2015).

31. Plan International. Adolescent Girls in Crisis: Voices Rohingya, June 2018.

FS介入自体が心理社会的苦痛を引き起こす可能性がある。

- フィリピンの台風Bophaの後、複数のアクターから食料支援が配布された後も、食料支援の遅れや制限がストレスの主な原因となったとして、女の子と男の子は食料配給について訴え続けた³²。

食料不安はまた、ストレス、不安、抑うつ³³の症状など、保護者のメンタルヘルスやウェルビーイングの悪化にも関連している。アメリカの調査では、母親のうつ病は、母親が食料不安を経験する確率を50～80%増加させることがわかった³³。保護者は、子どもが食料を得られないことを知っており、そのことに悲しみを表したり、子どもの学校での集中力にどのような影響を与えるかについて懸念を示したりする³⁴。

- フィリピンのある調査では、複数の災害を経験した世帯では、保護者のストレス、うつ病の症状、食料不安のレベルが高いことが報告されている³⁵。
- 2010年のハイチ地震の後、食料不足を経験した子どもは、食料不足を経験していない子どもと比較して、心的外傷後ストレスのレベルが高いと報告した大人と同居している可能性も高かった³⁶。

食料不安によるストレスは、子どもと保護者の関係を悪化させる。

- ウガンダでは、難民への配給の削減は家庭のストレスと苛立ちの重大な原因であると認識され、それが保護者と思春期の若者の緊張関係につながり、家庭内での喧嘩の増加につながった³⁷。
- チャド湖流域では、保護者が、経済的機会の欠如がストレスを生み、家族の結束や人間関係を悪化させ、思春期の女の子を含む子どもが虐待を受ける原因になっていると述べている³⁸。

32. UNICEF, Inter-Agency Child Protection Rapid Assessment Report, Child Protection Sub-cluster, March 2013

33. Laurenzi et al, "Food Insecurity, Maternal Mental Health, and Domestic Violence: A Call for a Syndemic Approach to Research and Interventions." *Maternal and child health journal* 24.4 (2020): 401–404.

34. Meyer et al, Protection and well-being of adolescent refugees in the context of a humanitarian crisis: Perceptions from South Sudanese refugees in Uganda, *Social Science & Medicine*, Volume 221, 2019, Pages 79–86.

35. Edwards et al, The influence of natural disasters on violence, mental health, food insecurity, and stunting in the Philippines: Findings from a nationally representative cohort, *SSM - Population Health*, Volume 15, 2021.

36. Food insufficiency as measured by the USDA Household Standard Food-Insecurity/Hunger Survey. Hutson et al. "Features of Child Food Insecurity after the 2010 Haiti Earthquake: Results from Longitudinal Random Survey of Households." *PLoS one* 9.9 (2014).

37. Meyer et al, Protection and well-being of adolescent refugees in the context of a humanitarian crisis: Perceptions from South Sudanese refugees in Uganda, *Social Science & Medicine*, Volume 221, 2019, Pages 79–86.

38. Plan International. *Adolescents Girls in Crisis: Voices from the Lake Chad Basin*.



再定住センターの自宅で皿洗いをする11歳（モザンビーク）。

©PLAN INTERNATIONAL



グアテマラの22歳の母親は、子どもに食事を与えるのに苦労することがある。
©PLAN INTERNATIONAL

家族離散

家族離散とは、子どもが両親から、あるいはそれまでの法的または慣習的な主たる保護者から引き離されることを指す。別居している子どもは、他の成人家族と一緒にいる場合もある。同伴者のいない子どもとは、引き離され、責任を持つ大人がいない子どもでもある。食料不安は、保護者または子ども自身が食料と生計の機会を探すため、一家離散につながる可能性がある。

食料不安が家族離散に至る場合、子どもはネグレクト、性暴力、身体的・精神的暴力のリスクに直面する。

- 2017年のケニアの干ばつでは、父親は一度に何ヶ月も家を空けることが多く、送金は散発的であったと報告されている。母親も仕事を求めて家を出るか、高負荷の仕事を引き受けることを余儀なくされ、子どもは十分な世話や監督を受けられないか、他の大人に預けられることになった。母親は、親戚や隣人に預けられた子どもは殴られたり働かされたりする危険があるが、子どもを一人にするよりはましだと感じていると報告している³⁹。

- ジンバブエの食料不安地域では、保護者が生計の機会を求めて南アフリカに移住した。思春期の若者は、CHHIに対する性暴力や搾取のリスクだけでなく、監督や指導の欠如も報告している⁴⁰。

場合によっては、子ども自身が家族を離れ、一人旅に出ることもあり、子どもの人身売買、性とジェンダーに基づく暴力(SGBV)、危険や怪我、死の危険にさらされることさえある。

- エルサルバドル、グアテマラ、ホンジュラスの中米諸国では、農業生産性の低下と農作物の損失が移住の原因として2番目に挙げられ、失業が最も多く挙げられた。アメリカに一人で渡航する子どもは、子どもの人身売買、性的搾取、強制労働の危険にさらされていた⁴¹。
- 1994～98年の北朝鮮の飢饉の際、何千人もの未婚の北朝鮮人女性が、家族の負担を最小限に抑えるために家から追い出され、国内の他の地域や中国との国境沿いで食料、住居、仕事を求めた。彼女たちの80%超が人身売買され、性的奴隷として売られたり、強制された結婚をさせられたりしたと考えられている⁴²。

39. Plan International. Investing in Child Protection and GBV in Food Crisis: The Link between Food Security and Child Protection and GBV.

40. Plan International, Women's Refugee Commission, The Cynefin Co., Our Voices, Our Future: Understanding child marriage in food-insecure communities in Chiredzi District, Zimbabwe, June 2022.

41. WFP, Inter-American Development Bank, IFAD, IOM, and Organization of American States, Food Security and Emigration: Why people flee and the impact on family members left behind in El Salvador, Guatemala, and Honduras.

42. Spears et al, "Gender, Famine, and Mortality," World Peace Foundation and Feinstein International Center, Occasional Paper #36, December 2021.

ネグレクト

ネグレクトとは、子どもの幸福に責任を持つ個人、コミュニティ、または機関が、子どもを実際または潜在的な危害から保護することを、意図的または無意識に怠ることを指す。基本的なニーズと適切な監督の欠如は、子どもの心理社会的苦痛、危険、傷害、早すぎる結婚、児童労働、性的搾取、性暴力、武装勢力や集団による徴集と利用のリスクを高める可能性がある。食料不安は、保護者による子どものネグレクトのリスクを高めることにつながっている。

食料不安とネグレクトの関連は、保護者が食料や生計の機会を求めて家を離れる時間の増加で説明できる。また、不十分な食物摂取の直接的な結果として保護者の疲労や倦怠感が増すこと、あるいは抑うつや不安といった食料不安に伴う精神衛生上の転帰により説明することもできる。

- タイのバン・マイ・ナイ・ソイ難民キャンプでは、保護者のストレスの原因として最も頻繁に挙げられたのは、不十分な食料と収入であった。KIIは、保護者が仕事や食料調達に出かけると、子どもが一人取り残されると報告している⁴³。
- 干ばつの影響を受けたソマリアでは、68%の子どもが、保護者が子どもの所在や安全をあまり気にしなくなったと報告し、55%が保護者が子どもを学校に通わせる可能性が低くなったと述べている⁴⁴。パプアニューギニアでは、2016年の深刻な食料不足が育児放棄につながったと報告されている⁴⁵。
- 人道的な環境では、女の子、UASC、障害のある子ども、継父母や拡大家族（夫婦と子供からなる核家族にその血縁者が同居している家族のこと）と暮らす子どもは、ネグレクトの危険に特にさらされている可能性がある。障害や複雑な身体的・精神的健康問題を抱える子どもは、他の子どもよりもネグレクトされる可能性が3倍以上高い⁴⁶。

さまざまな形のFS介入は、子どものネグレクトや監視の低下につながる可能性がある。

- プログラムの条件として、公共事業計画、就労のための現金プログラム、または研修に参加している大人の保護者は、質の高い保育を見つけれず、子どもの監督を減らしたり、子どもを放置したりする可能性がある⁴⁷。



テントから外を眺める7歳の女の子、ブルキナファソ。

©PLAN INTERNATIONAL

43. Meyer et al, The nature and impact of chronic stressors on refugee children in Ban Mai Nai Soi camp, Thailand, *Global Public Health*, 8:9, 1027-1047, 2013.

44. Save the Children, April 2017, "Child protection needs assessment Somalia".

45. Child Partnership Program Papua New Guinea, Food Security Assessment Report (Kandep-Panduaga), 6 April 2016

46. The Alliance for Child Protection in Humanitarian Action, Child Neglect in Humanitarian Settings: Literature review and recommendations for strengthening prevention and response, 2018.

47. Save the Children, Child Safeguarding for Cash and Voucher Assistance Guidance, 2019.

身体的・精神的暴力

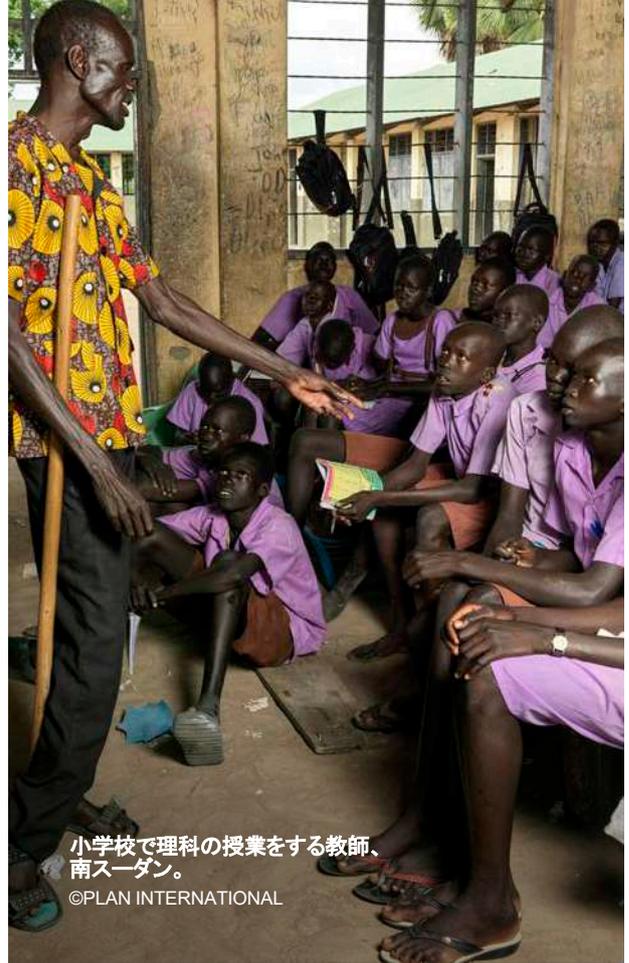
身体的・精神的暴力とは、子どもを殴る、叩く、拷問する、脅す、嘲笑する、威嚇するなど、意図的な危害を指す。食料不安は、家庭、学校、コミュニティにおける子どもの身体的・精神的暴力を増加させるだけでなく、仲間内での暴力の一形態として子ども同士の暴力も増加させるという証拠がある。

食料不安は、子どもが家庭内で経験する身体的・精神的暴力とも関連している。

- ブルキナファソで行われた母親へのインタビューによると、飢饉の時期には、幼い子どもが泣くなどの苦痛の徴候を示すことが増加し、母親は家庭内の不安や、子どもに向けられた怒りを含む怒りが増加すると報告している⁴⁸。ブルキナファソで行われた地方の極貧の子どもを対象とした別の調査では、食料不安、家族からの暴力、危険な労働への曝露が、最も一般的な有害体験であり、同時に発生していると母親と思春期の若者から報告されている⁴⁹。
- また、FSIに影響を与える自然災害と、身体的・精神的虐待との間に関連性があることも、調査で明らかになっている。フィリピンの量的調査では、複数の自然災害を経験した子どもは、大人や保護者から傷つけられたり、暴力を目撃したりするリスクが高まることが示されている⁵⁰。
- ソマリアでのニーズ評価では、干ばつ後に保護者の子どもへの身体的虐待が増加したと報告した子どもは41%であった⁵¹。

子どもに対する身体的・精神的暴力の原動力は食料不安だけではない。

- アフガニスタンでの量的研究では、しつけとして母親が身体的暴力を用いることは、家庭の食料不安と関連していた。この調査では、食料不安、精神衛生の状態、ジェンダー不平等な態度、母親のIPV体験のすべてが、子どもに対する身体的暴力に影響していることが明らかになった⁵²。



小学校で理科の授業をする教師、南スーダン。

©PLAN INTERNATIONAL

食料不安は、学校でのいじめや仲間からの暴力とも関連している。社会経済的地位が低い子どもは、それを理由にいじめられるかもしれない、それは食料不安や貧困と強く関連している。逆に、食料不安を抱えている子どもは、社会的支配や仲間からの受容を求め方法として暴力を振るうかもしれない。

- アフガニスタンの学齢期の子どもを対象とした量的調査では、仲間に対する身体的または精神的な暴力を経験し、加害したことがあると報告した男の子と女の子は、暴力を報告しなかった女の子と男の子に比べて、食料不安経験尺度の得点が有意に高かった⁵³。
- パキスタンの学齢期の子どもを対象とした調査では、仲間内で暴力を振るうことと、飢餓スケールで高得点を示すこととの間に、強い関連があることがわかった⁵⁴。

食料不安と仲間内での暴力との関連は、食料不安がメンタルヘルスに与える影響や、限られた資源の奪い合いによっても説明できるだろう。食料不安が苦痛や攻撃性を高め、仲間同士の争いが起こりやすくなる。

48. Nanama et al, Altered social cohesion and adverse psychological experiences with chronic food insecurity in the non-market economy and complex households of Burkina Faso, *Social Science & Medicine*, Volume 74, Issue 3, 2012, Pages 444-451.

49. Ismayilova, Leyla et al. "Maltreatment and Mental Health Outcomes Among Ultra-Poor Children in Burkina Faso: A Latent Class Analysis." *PLoS one* 11.10 (2016).

50. Edwards et al, The influence of natural disasters on violence, mental health, food insecurity, and stunting in the Philippines: Findings from a nationally representative cohort, *SSM - Population Health*, Volume 15, 2021.

51. Save the Children, April 2017, "Child protection needs assessment Somalia".

52. Ndungu et al, Afghan Women's Use of Violence Against Their Children and Associations with IPV, Adverse Childhood Experiences and Poverty; A Cross-Section and Structural Equation Modelling Analysis," *International journal of environmental research and public health*, 2021-07-27, Vol.18 (15), p.7923.

53. Corboz, Julianne et al. "Children's Peer Violence Perpetration and Victimization: Prevalence and Associated Factors Among School Children in Afghanistan." *PLoS one* 13.2 (2018).

54. Karmaliani et al, Peer Violence perpetration and victimization: Prevalence, associated factors and pathways among 1752 sixth grade boys and girls in schools in Pakistan. *PLOS ONE*. 2017; 12(8).

55. Save the Children, April 2017, "Child protection needs assessment Somalia".

- 干ばつの被害を受けたソマリアの評価では、回答者の53%が「子どもが攻撃的な行動を示す」と認識し、50%が「子どもが学校に行きたがらない」と答え、44%が普段と違う泣き声や叫び声を報告している⁵⁵。
- ウガンダの難民キャンプでは、食料配給の削減が兄弟間や仲間同士の争いの原因になっていると認識されていた。また、ウガンダの難民キャンプにいる思春期の若者は、食料配給センターでの過密状態や、待ち時間の長さによる緊張、希少な資源をめぐる競争から、争いが増えたと述べている⁵⁶。
- 過半数の女性が18歳未満で結婚している南スーダンでは、一夫多妻制の家庭で、妻同士の食料などの分配をめぐる争いが特に頻繁で激しいと報告されている⁵⁷。

食料不足はまた、子どもがコミュニティで暴力を受けるリスクも生み、新規難民と既存難民のコミュニティ間緊張を高める可能性がある。

- ケニアとパプアニューギニアの子どもの報告によると、子どもは庭や隣人から食べ物を盗むことに頼るが、捕まって殴られたりする⁵⁸。
- ウガンダの2つの難民居住地で、2015年以前に到着した思春期の若者と成人の難民に、2016年の新たな難民の到着が思春期の女の子と男の子の健康と幸福にどのような影響を与えたかを尋ねた調査がある。最も頻繁に言及された影響は、新たな難民の到着による食料配給の減少であった。2015年以前に到着していた難民は、食料配給の50%カットを経験し、保護者と思春期の若者の両方が、思春期の若者は定期的に食事を抜き、配給品の販売による収入が失われた結果、油の購入や学費の支払いなどの費用をまかなうことができないと報告した⁵⁹。

FS プログラムは、子どもを身体的・精神的暴力の危険にさらす可能性もある。

- 食料援助を求める子どもは、商人、業者、コミュニティ住民による身体的な攻撃や嫌がらせにさらされる可能性がある。子どもはまた、特に貴重品や大金を持っている場合、窃盗を受け、攻撃にもさらされる可能性がある⁶⁰。

児童労働

児童労働とは、子どもから教育の機会を奪う、精神・肉体・社会・道徳的に危険で有害な労働を指す。すべての児童労働が児童労働とみなされるわけではない。危険な労働は児童労働の最悪の形態であり、子どもの健康、発育、安全、道徳を害する可能性が高いと定義されている。児童労働は、食料不安に対する一般的な対処法である。

多くの国で、子どもの労働は家族の生存の鍵であると認識されている。子どもは、自身が食料不安に対処するための家庭の対処戦略の重要な一翼を担っている可能性があることを認識しており、また、働いて親や兄弟を支える必要性を感じている可能性もある⁶¹。子どもはまた、自身の空腹に対処するために働き始めるかもしれない。

- エチオピアのある女の子は、豆の収穫は疲れるが、「私たちが飢えてしまうし、教材も手に入らなくなるから」と断れなかったと説明した⁶²。彼女の母親によると、娘の労働は、家族が食料、コーヒー、衣服、教材を購入するために欠かせないものだった。
- ベネズエラでは、子どもは靴磨き、食料品の包装、使い走りなどの一時的な仕事と教育を両立させていると報告しているが、長期的に見れば、教育の妨げになるような正式な仕事に就く可能性の方が高いかもしれない⁶³。
- 南スーダンでは、9～12歳の女の子は飢えをしのぐために保護者や隣人の農場に加わったり、路上で物乞いをしたりする一方、男の子は建設業、鉱山、ホテルやレストラン、酒造業、漁業などで働くことを報告した。男の子はまた、お金を稼ぐ方法として、車や家畜を盗むなどの犯罪に手を染めることも報告した。13～17歳の女の子は、薪集め、酒造業、建設現場や農場での仕事、地元の市場で働くことを報告し、13～17歳の男の子も、家に食べ物がないため、学校をやめて物乞いをしたり、路上で生活したりすることを報告した⁶⁴。

56. Meyer et al, Protection and well-being of adolescent refugees in the context of a humanitarian crisis: Perceptions from South Sudanese refugees in Uganda, *Social Science & Medicine*, Volume 221, 2019, Pages 79-86.

57. World Vision, "Child Marriage and Hunger Crisis: South Sudan Case Study", 2021. Ellsberg et al. "If You Are Born a Girl in This Crisis, You Are Born a Problem": Patterns and Drivers of Violence Against Women and Girls in Conflict-Affected South Sudan. *Violence Against Women*. 2021;27(15-16):3030-3055.

58. Child Partnership Program Papua New Guinea, *Food Security Assessment Report (Kandep-Panduaga)*, 6 April 2016.

59. Meyer et al, Protection and well-being of adolescent refugees in the context of a humanitarian crisis: Perceptions from South Sudanese refugees in Uganda, *Social Science & Medicine*, Volume 221, 2019, Pages 79-86.

60. Save the Children, *Child Safeguarding for Cash and Voucher Assistance Guidance*, 2019.

61. UNICEF, *Inter-Agency Child Protection Rapid Assessment Report, Child Protection Sub-cluster*, March 2013

62. Morrow et al, "I started working because I was hungry": The consequences of food insecurity for children's well-being in rural Ethiopia, *Social Science & Medicine*, Volume 182, 2017, Pages 1-9.

63. Bernal et al, Children Live, Feel, and Respond to Experiences of Food Insecurity That Compromise Their Development and Weight Status in Peri-Urban Venezuela, *The Journal of Nutrition*, Volume 142, Issue 7, July 2012.

64. Save the Children. *Children's Recommendations for the hunger responses in South Sudan*. 2021.

- レバノンのベカア渓谷で、登録済みのシリア難民と未登録のシリア難民を対象とした混合手法の研究によると、登録済みの難民全員にとって、食料の配給と多目的現金支給が主な生活源であった。しかし、登録の有無にかかわらず、11歳程度の子どもが児童労働を通じて家族の生計を支えていた⁶⁵。

思春期の女の子と男の子では、生計を立てる機会が異なり、その役割もジェンダー化されている。このことは、彼らの潜在的な収入や、食料を入手し他のニーズを満たす能力に影響を与える。生計プログラムは多くの場合、18歳未満を除外している。

- ナイジェリアの紛争被災地では、思春期の男の子の役割は、使い走り、農作業、生計活動であった。思春期の女の子は、弟妹の世話や、水汲み、料理、掃除・洗濯などの家事をするのが一般的だった。思春期の男の子の有給雇用や生計活動への従事も、思春期の女の子の役割よりも有意に高く評価された⁶⁶。
- 南スーダンでは、思春期の女の子は、正規の有給雇用とは対照的に、市場で非正規の小規模生計活動に従事することが多いと報告されている⁶⁷。
- チャド湖流域では、思春期の女の子は家族の要求を満たすために非正規労働や規制のない労働に従事し、それが更に彼女たちを危険にさらした。思春期の男の子は、正式な雇用機会をより多く得ることができたため、より大きな収入を得る可能性があり、食料を購入する能力もあった。その結果、思春期の男の子は家庭で受け取る食料を補うことができた⁶⁸。

食料不安の状況下で児童労働がどの程度増加するかは、経済状況、雇用法、移動の自由など、他の文脈的要因に影響される可能性が高い。

- ソマリアでは、回答者の55%が、干ばつの結果、食料を買ったり、副収入を得たりする必要性から、児童労働に従事する子どもの数が増加したと答えている。子どもはゴミを集めたり、靴を磨いたり、ウェイターやポーターなどの非正規労働に従事したりした。同じ調査では、栄養不良や経済活動の全般的な低下により、児童労働が減少したと報告している者もいる⁶⁹。

- バングラデシュでは、移動の自由がなく、生計のための取り組みが制限されているため、思春期の女の子の所得創出機会に障壁が生じ、それが彼女たちの全体的な脆弱性に拍車をかけている⁷⁰。
- 2019年にレバノンで登録されたシリア難民を対象とした調査によると、難民世帯の97%が生計維持のための対処戦略を必要としていた。30%が学校関連の支出を減らし、12%が子どもを学校から中途退学させ、5%が学齢期の子どもを収入創出に従事させ、1%が早すぎる結婚に頼った⁷¹。
- レバノンで、KIは、15歳未満のシリア人の子どもは法的証明書を持つ必要がないため、検問所を通過し、雇用機会にアクセスしやすいと回答した⁷²。

FSや生計プログラムには、児童労働のリスクを意図せず増大させるものもある。

- 就労のための現金給付プログラムでは、家族ベースの農業生産性を向上させるための現金給付が、特に子どもを中途退学させてしまう場合、児童労働を引き起こす可能性があった。保護者がスキームに参加している子どもは、保護者に代わって以前の職場で働くために学校を中途退学したり、子ども自身がスキームに直接参加することもある⁷³。女の子は、家事や世話のために学校を中途退学する危険性が特に高い。
- プログラムは新たな就労機会を創出するが、その機会を大人の労働力では満たすことができず、子どもによって満たされることになるのだ⁷⁴。
- 脆弱な集団が支援から排除されていたり、正規の労働市場へのアクセスがない場合、家族は児童労働に頼る可能性が高くなる⁷⁵。
- FSプログラムは、児童労働を利用するサプライチェーンや産業、企業に依存している場合がある。

65. Nabulsi, Dana et al. "Voices of the Vulnerable: Exploring the Livelihood Strategies, Coping Mechanisms and Their Impact on Food Insecurity, Health and Access to Health Care Among Syrian Refugees in the Beqaa Region of Lebanon." PLoS one 15.12 (2020).

66. Plan International. Adolescent Girls in Crisis: Voices from the Lake Chad Basin, 2018.

67. Plan International. Adolescent Girls in Crisis: Voices from the South Sudan Crisis, 2018.

68. Plan International. Adolescent Girls in Crisis: Voices from the Lake Chad Basin, 2018.

69. Save the Children, April 2017, "Child protection needs assessment Somalia".

70. Plan International. Adolescents Girls in Crisis: Rohingya, 2018.

71. 10%が生産的資産の売却に頼り、54%が健康に関する支出を減らした。2019年 Vulnerability Assessment for Syrian refugees (VASyR) 参照。

72. Nabulsi, Dana et al, "Voices of the Vulnerable: Exploring the Livelihood Strategies, Coping Mechanisms and Their Impact on Food Insecurity, Health and Access to Health Care Among Syrian Refugees in the Beqaa Region of Lebanon." PLoS one 15.12 (2020).

73. The Alliance for Child Protection in Humanitarian Action, Cash Transfer Programming and Child Protection in Humanitarian Action: Review and Opportunities to Strengthen to Evidence, 2019.

74. The Alliance for Child Protection in Humanitarian Action, Inter-Agency Toolkit: Preventing and Responding to Child Labour in Humanitarian Action. 2020.

75. Ibid.

武装勢力および 武装グループによる 徴集と利用

子どもは、義務的、強制的、または非強制的な手段を用いて、武装勢力や武装集団に参加させられることがある。子どもは、戦闘員、料理人、衛兵、スパイ、性的目的など、さまざまな方法で利用される。子どもは、暴力を目撃、経験、または犯すことを強要され、肉体的・精神的健康に直接的・長期的な影響を受けるかもしれない。食料不安が、子どもが武装勢力や武装集団に徴用され、利用されるリスクを増大させる一因となっていることを示す証拠もある。

食料不安と武装集団や武装勢力への徴用との関連は、紛争の性質やより広範な背景によって異なる。

- シエラレオネでは、金銭や食料が提供されれば、武装勢力や武装集団に参加する可能性が高いことがわかったが、ブルンジやコロンビアのような政治的動機に基づく紛争では、参加動機として食料が挙げられることはなかった。
- 世界銀行が7カ国を対象に実施した調査では、反政府運動やストリートギャングに加わる最も一般的な動機として、生計や継続的な収入を得る機会の不足が挙げられている⁷⁶。FSIについては明確に言及されていないが、持続的な生計機会は家計のFSを支える傾向がある。

食料などの資源へのアクセスもまた、子どもの武装集団や武装勢力への自発的または強制的な徴用や利用に影響を与える可能性がある。

- ウガンダ北部では、家族が娘を兵士や民兵の「臨時の妻」や第2、第3の妻にするよう勧め、保護と安全を高め、食料や金銭、その他の資源を得るようにしていた⁷⁷。
- リベリアでは、IDPや難民キャンプの子どもが、武装勢力や武装集団が偽の食料配給で子どもを保護者から引き離したり、食料を探しに出かけている間に武装集団に捕まると報告している。場合によっては、男の子と女の子は、武装集団から財産や食料が盗まれるのを防いだり、略奪によって手に入る食料を手に入れる手段として、武装集団に加わったと話した。また、民間人に嫌がらせをしたり、子どもを強制的に徴用したりしないためのインセンティブとして、村人から武装集団に食料が提供されていたことも報告されている。村に食料がなくなると、子どもの徴用を防ぐことができなくなるのである⁷⁸。

「食料を探すのが大変で...母に、戦闘員に会いに行くといいました。毎日、彼らのガールフレンドが料理を作ってくれましたから」

女の子、17歳、リベリア⁷⁹



新しく再開された市場でミルクや商品売る女性たち、ピボール、南スーダン。

©PLAN INTERNATIONAL

76. World Bank, World Development Report 2011: Conflict, Security, and Development. Washington, DC: World Bank.

77. Spears et al. "Gender, Famine, and Mortality," World Peace Foundation and Feinstein International Center, Occasional Paper #36, December 2021.

78. Save the Children, Fighting Back: Child and community-led strategies to avoid children's recruitment into armed forces and groups in West Africa.

79. Ibid.

ドングリ・ダ・モを頬張る女の子、ニジェール。

©PLAN INTERNATIONAL



危険と負傷

危険と傷害とは、子どもを傷つけたり、殺したりする意図的でない危害のことである。食料不安は、直接・間接的な方法で、子どもの危険と傷害のリスクを高める。

食料不安は、子どもが食料の入手や準備に費やす時間を増やし、子どもの危険や怪我のリスクを高める。子どもは調理中に怪我をする大きなリスクがある。不十分な食料摂取は、子どもたちの基本的機能にも影響を及ぼし、事故のリスクにつながる。

- パプアニューギニアとウガンダの子どもは、疲労感、学校での失神、空腹のために通学路で車にはねられる危険性が高まったと報告している⁸⁰。

食料不安の結果、保護者の監督が手薄になると、子どもが事故で怪我や死亡するリスクも高まる可能性がある。食料不安のために児童労働に従事している子どもも、労働中の危険や傷害のリスクが高まる可能性がある。

- カンボジアでは、他人の家や農場で働いて収入を得なければならない子どもは安全だと感じておらず、暑さで体調を崩すと報告している⁸¹。

FSの介入、特に食料配給は、子どもにとってリスクでもある。

- マラウイでは、難民キャンプに住む子どもが、食料を買うために列に並んでいる間に喧嘩や身体的な怪我を負う危険があり、配給から戻る時に窃盗や暴力に巻き込まれると報告した。UASC、CHHIは、窃盗に狙われていることを報告した。場合によっては、子どもたちは配給の後、家で食料を守るために学校を休んだ⁸²。

80. Meyer et al, Protection and well-being of adolescent refugees in the context of a humanitarian crisis: Perceptions from South Sudanese refugees in Uganda, *Social Science & Medicine*, Volume 221, 2019, Pages 79-86. Child Partnership Program Papua New Guinea, *Food Security Assessment Report (Kandep-Panduaga)*, 6 April 2016.

81. Polack E, *Child rights and climate change adaptation: voices from Cambodia and Kenya*. In: *Children in a Changing Climate*; 2010.

82. Plan International Malawi. *Integrated CP-SGBV and Food Security Case Study*.

早すぎる結婚(児童婚)

早すぎる結婚とは、当事者の一方または双方が18歳未満である公式または非公式の結婚を指す。子どもは結婚に完全な同意をできないため、ほとんどすべての早すぎる結婚は強制されたものとみなされる。18歳未満で結婚する女の子は、IPVや妊娠中の危険な合併症を経験する可能性が高く、しばしば学校を中途退学することが期待される。早すぎる結婚は、食料不足に直面する家族や女の子が用いる負の対処法である。

家族は、経済的負担を減らしたり、養う家族が一人少なくなるようにするために、早すぎる結婚を利用している⁸³。

- エチオピアでは、干ばつの影響を受け、食料が不足している地域で、早すぎる結婚が51%増加したと報告されている。他の地域では、早すぎる結婚が4倍増加したと報告されている⁸⁴。
- ニジェールの干ばつでは、母親は娘を裕福な男性に嫁がせて、他の子どもの世話をできるようにすると報告している。2010年のケニアの飢饉とパキスタンの洪水の後、早すぎる結婚が増加したという報告があった。ケニアでは、プラン・インターナショナルの報告によると、12~13歳の女の子が第2夫人として年上の男性と結婚し、家族が養う家計の人数を減らし、経済的・物質的な余裕を獲得している。また、4~5歳の女の子が他の家族のもとへ送られ、家族内の息子の将来の花嫁として意図されているケースもあった⁸⁵。

災害が繰り返される状況では、家族は予想されるショックや食料不安に先立ち、早すぎる結婚を利用するかもしれない。

- バングラデシュの家族へのインタビューでは、河川の浸食などの自然災害で家や生計を失うことを見越して、娘を結婚させたという家族もいた⁸⁶。

思春期の女の子は、いつ誰と結婚するかを決める決定権が限られている。場合によっては、女の子が自身の食べ物を増やす手段として結婚を始めることも報告されている。

- ネパールでは、女の子は結婚して、親と同居していた場合よりも多くのものを食べることができるようになったと報告している。ジンバブエでは、思春期の女の子が実家での食料不安から逃れる方法として結婚を求めたと報告している⁸⁷。
- 武力紛争の文脈では、女の子自身が家族の安全と食料とシェルターへのアクセスを確保するために、「進んで」戦闘員を夫にしたケースもある⁸⁸。

しかし、女の子は、結婚後に食料不安の増大に直面する可能性がある。

- バングラデシュでは、持参金の支払いを増やすよう家族に強いるため、夫が妻に食事を与えなかったと報告されている⁸⁹。タンザニア、ネパール、バングラデシュの既婚の女の子は、義理の家族から虐待を受けたり、食事を与えられないと報告している⁹⁰。また、一夫多妻制の夫婦の女の子は、他の妻と食事をめぐって争ったり、他の妻から食事を与えられないことがあると報告している⁹¹。
- 既婚の女の子、特に2番目の妻である女の子は、自身や子どものために食料を入手することを主張する上で困難に直面する可能性が高く、自身の健康、栄養、FSIについて十分な知識がない可能性がある。バングラデシュでは、World Visionの報告によると、妊娠中の女の子は、出産の痛みを軽減するために、意図的に食事を避けていた⁹²。

限られた例ではあるが、食料不安は、貧困や失業といった他の要因のために、早すぎる結婚の減少につながりうる。

- サヘル地域では、家族が持参金を用意できないことや、若い男性が仕事を求めて他地域に移住することが原因で、早すぎる結婚が減少していることが観察された⁹³。ソマリアにおける2017年の干ばつ評価では、回答者の65%が、干ばつのためにコミュニティでの結婚が減少したと報告している。だが、同じ評価では、回答者の59%が、干ばつのために金銭的な誘因、家族を維持するための収入不足、キャンプでの混雑の結果、保護者によって女の子が幼いうちに結婚させられる可能性が高くなっていると考えている⁹⁴。

食料不安は、早すぎる結婚を助長する要因のひとつにすぎない。その他の要因としては、ジェンダー不平等、治安、宗教的、文化的規範、心理社会的要因が挙げられる。

83. Gliński et al, The Child, Early, and Forced Marriage Resource Guide Task Order, Banyan Global, 2015.

84. Davies Lizzie, "Ethiopian drought leading to 'dramatic' increase in child marriage, UNICEF warns," The Guardian, 30 April 2022.

85. Plan International. Investing in Child Protection and GBV in Food Crisis: The Link between Food Security and Child Protection and GBV.

86. Human Rights Watch, Marry Before Your House is Swept Away; Child Marriage in Bangladesh, June 9, 2015.

87. Plan International, Women's Refugee Commission, The Cynefin Co., Our Voices, Our Future: Understanding child marriage in food-insecure communities in Chiredzi District, Zimbabwe. June 2022.

88. Mazurana et al, Child marriage in armed conflict, International Review of the Red Cross, 2019, 101(911), 575-601.

89. World Vision, Untying the Knot: Exploring Early Marriage in Fragile States March 2013.

90. Human Rights Watch, "Out Time to Sing and Play": Child Marriage in Nepal, September 8, 2016.

91. Human Rights Watch, No way out: Child marriage and human rights abuses in Tanzania, October 29, 2014.

92. World Vision, Untying the Knot: Exploring Early Marriage in Fragile States March 2013.

93. Plan International. Investing in Child Protection and GBV in Food Crisis: The Link between Food Security and Child Protection and GBV.

94. Save the Children, April 2017, "Child protection needs assessment Somalia".



自宅で調理用の薪を集める女の子、グアテマラ。
©PLAN INTERNATIONAL

- エジプト、ヨルダン、レバノン、モロッコ、スーダン、イエメンにおける人道的環境と開発環境における早すぎる結婚に関する比較調査研究では、人道的環境における早すぎる結婚に影響を与える要因として、女の子が生計に貢献できるか、働けるか、が挙げられている。女の子が学校に通えず、移動の自由が制限されていたり、キャンプに閉じ込められていたりすると、家計に貢献できず、家族の重荷とみなされる。その結果、女の子を結婚させることは、家族が資源を解放し、追加的な資源を手に入れる方法となった。
- ジンバブエでは、プラン・インターナショナルと女性難民委員会の調査により、経済的困難、伝統的なジェンダー規範、否定的な同調圧力などの他の要因に加えて、食料不安が思春期の女の子の結婚に影響を与え、特に思春期の若者が世帯主の世帯に住む思春期の女の子が危険にさらされていることがわかった⁹⁵。

FSの介入は、意図せず早すぎる結婚を可能にしかねない。

- 持参金制度が採られている場合、多額の無条件現金給付が貯蓄に回されたり、持参金を支払うための信用供与に使われたりしていることが判明している。インドでは、支給された現金は持参金やその他の結婚費用に充てられた⁹⁶。

IPV

IPVとは、身体・性・感情・経済的な暴力で、恋愛相手に対するあらゆる形態の暴力を指す。IPVを伴う家庭に暮らしたり、IPVを目撃したりするなど、IPVに接している子どもは、身体的・精神的な虐待を受けたり、精神衛生や心理社会的苦痛に悩まされたり、自身の子どもを虐待したりする可能性が高い⁹⁷。食料不安は、IPVに接している子どもやIPVを経験している既婚の女の子と関連している。

いくつかの調査で、食料不安とIPVの関連性が判明している。

- 移住者の多いウガンダの2つの地区における量的調査では、食料不安は男性の身体的・性暴力の加害と関連していた。食料不安は、男性が性・身体的IPVの両方を犯すと自己申告する割合が約3倍になることに関連していた⁹⁸。
- 南アフリカの都市周辺地域を対象とした調査で、食料不安は、男性がIPVを犯す確率を2倍にすることがわかった⁹⁹。
- 南スーダンでは、妻への身体的虐待の引き金として、財産を失い、仕事も雇用機会もないために、男性がアルコールに依存する割合が増加したことが挙げられている¹⁰⁰。

女性と女の子は家計管理が認められない一方で、しばしば家族の食事の責任を負わねばならず、食事が不十分であれば非難される。

- バングラデシュの地方で、回答者は、不十分な量の食料が男性に提供されると、それが妻への報復的暴力につながる可能性があるとして述べた。また、男性はGBVの一種として、食料を買うための資源を与えないこともある¹⁰¹。
- ウガンダの16~24歳の難民を対象とした調査では、食料不足やその他の資源不足が緊張やストレスを生み、それがIPVにつながり、一夫多妻制の夫婦では深刻化したと回答している¹⁰²。

95. Plan International, Women's Refugee Commission, The Cynefin Co., Our Voices, Our Future: Understanding child marriage in food-insecure communities in Chiredzi District, Zimbabwe, June 2022.
96. Girls Not Brides. How cash transfers contribute to ending child marriage. Thematic Paper 1.
97. Wathen, Children's exposure to intimate partner violence: Impacts and interventions, Paediatr Child Health. 2013 Oct;18(8):419-22.
98. Awungafac, et al, Household food insecurity and its association with self-reported male perpetration of intimate partner violence: a survey of two districts in central and western Uganda BMJ Open 2021.
99. Hatcher, et al. Pathways from food insecurity to intimate partner violence Perpetration among Peri-Urbanmen in South Africa. American Journal of Preventative Medicine. 2019; 56:765-72.
100. Ellsberg et al. "If You Are Born a Girl in This Crisis, You Are Born a Problem": Patterns and Drivers of Violence Against Women and Girls in Conflict-Affected South Sudan. Violence Against Women.
101. Lentz EC, Complicating narratives of women's food and nutrition insecurity: Domestic violence in rural Bangladesh. World Development 2018; 104:271-80.
102. Logie et al, "Exploring Resource Scarcity and Contextual Influences on Wellbeing Among Young Refugees in Bidi Bidi Refugee Settlement, Uganda: Findings from a Qualitative Study," Conflict and health 15.1 (2021): 3-11.

食料不安はIPVの一因に過ぎない。その他の要因としては、不健全な精神状態、不公平なジェンダー意識、アルコール摂取、複数の親密なパートナーなどがある¹⁰³。

- 紛争後のコートジボワール都市部の質的調査では、参加者はIPVの一因として、居住の不安定さ、食料不安、経済的なセーフティネットの欠如を挙げている。選挙に関連した暴力の後、物価が高騰したため、多くの世帯が食料不安に直面し、居住が不安定になり、子どもを学校から中途退学させざるを得なくなった。養う能力に欲求不満を抱いた男性は、パートナーに対して身体的・精神的虐待や性暴力をふるったと報告されている。極度の飢餓と貧困に直面していた女性は、衣服や食料、学費の支給といった経済的・物質的支援を受けるために、夫以外の男性に性的サービスを提供することを余儀なくされた。しかしこのことは却って、夫からの搾取や暴力を含め、女性が更なる搾取や暴力を受けるリスクを高めた。家計を支えるという伝統的またはステレオタイプ的なジェンダーの役割を男性が果たせないことは、男性らしさの認識に影響を与え、男らしさを示すために暴力を行使する一因となっているようだ¹⁰⁴。



欠席率抑制のための給食プログラムの一環として、小学校で給食を食べる女の子、ケニア。
©PLAN INTERNATIONAL

性的搾取

性的搾取はSGBVの一形態であり、性的な目的のために、脆弱性、権力、信頼の立場を実際に乱用すること、または乱用しようとすることを指す。性的搾取は、「性取引」や「食べるための性」といった用語を含むことがある。性的搾取と虐待とは、人道支援ワーカーが現地コミュニティ住民を性的搾取または虐待することを指す。

食料や食料を買うための金銭と引き換えに行われる性行為など、子どもの性的搾取は、人道的な状況において子ども、特に女の子が直面する重要なCPリスクである。

- ケニアでは、子どもは、女の子が性的搾取を受けやすくなる理由として飢餓を挙げている¹⁰⁵。ウガンダのビディビディ難民キャンプでは、思春期の女の子やユース女性が性取引に従事する理由として、食料を含む家計資源の不足がしばしば指摘されている¹⁰⁶。
- ルワンダでは、回答者は、思春期の女の子が物質的な商品を手に入れる手段として、性取引に従事していると報告している。「お母さんはトウモロコシ以外の食べ物を買うことができないかもしれないし、それをくれる人を探すのよ」- ルワンダ、思春期の女の子¹⁰⁷。
- 2016年、南スーダンのルンベクで行われた「民間人の保護」に関する調査によると、性的搾取や虐待は日常茶飯事であり、女性は食料やサービスと引き換えにセックスを要求されていた。報告には、人道支援活動家やコミュニティリーダーが、食料やその他の必需品と引き換えにセックスを要求したことも含まれている¹⁰⁸。
- マラウイでは、女の子やユース女性が食料配給中に性的搾取や虐待を受けたと報告されている。例えば、配給リストに載せてもらったり、長い列を避けるために、性的に引き換えをしたりしたのである¹⁰⁹。
- ナイジェリアでは、女の子と女性は、家族の食料を得たり、限られた生計の機会を得たりするために、また拘束や殴打の恐怖から、国家治安部隊によって性的搾取を強いられていると報告された。女性は、自分たちの食料が兵士によって盗まれ、売られたと報告している¹¹⁰。

103. Laurenzi et al, "Food Insecurity, Maternal Mental Health, and Domestic Violence: A Call for a Syndemic Approach to Research and Interventions." *Maternal and child health journal* 24.4 (2020): 401-404.

104. Cardoso et al, What Factors Contribute to Intimate Partner Violence Against Women in Urban, Conflict-Affected Settings? Qualitative Findings from Abidjan, Côte d'Ivoire, *Journal of Urban Health* 93, 364-378 (2016).

105. Polack, Child rights and climate change adaptation: voices from Cambodia and Kenya. In: *Children in a Changing Climate*; 2010.

106. Logie et al, "Exploring Resource Scarcity and Contextual Influences on Wellbeing Among Young Refugees in Bidi Bidi Refugee Settlement, Uganda: Findings from a Qualitative Study," *Conflict and health* 15.1 (2021): 3-11.

107. Bermudez et al, "Safety, Trust, and Disclosure: A Qualitative Examination of Violence Against Refugee Adolescents in Kiziba Camp, Rwanda," *Social science & medicine* (1982) 200 (2018): 83-91.

108. Ellsberg et al, "If You Are Born a Girl in This Crisis, You Are Born a Problem": Patterns and Drivers of Violence Against Women and Girls in Conflict-Affected South Sudan. *Violence Against Women*.

109. Plan International Malawi, *Integrated CP-SGBV Food Security Assessment*.

110. Amnesty International, "They Betrayed Us": Women who survived Boko Haram raped, starved, and detained in Nigeria. 2018

性暴力

性暴力はSGBVの一形態であり、他人の意思に反して行われるあらゆる性行為を指す。性的暴力には強姦が含まれ、これは合意のない膣、肛門、または口腔への、身体の一部または物体を他者に挿入することである。

食料不安は、子どもの性暴力のリスク増大と関連している。食料不安は、子どもが**食料、水、薪の収集**により多くの時間を費やすことになり、その結果、性暴力にさらされる危険がある。

- ルワンダのキビザ難民キャンプの質的調査では、思春期の若者と保護者は、思春期の若者に対する暴力の根本的な原因として、資源の制約と経済的不安を認識していた。薪がないこと、薪を集めに行くことが、思春期の若者を身体的・性的虐待にさらすとしてしばしば報告されている¹¹¹。
- ソマリアでは、干ばつ後に子どもへの暴力が増加したと報告した回答者のうち、80%が薪集めの際に、71%が家畜の世話の際に、66%が水汲みの際に性暴力を受けたと指摘している¹¹²。ウガンダでは、女性と女の子が性暴力に遭う場所として、水汲みと薪集めが挙げられている。環境の悪化は性暴力のリスクを増大させると見られている¹¹³。
- 2016年の南スーダンでの質的調査では、女性はUNMISSが保護する一般市民保護地から外に出て、食料の調達、農作業、薪集め、生業に従事する場合、コミュニティ住民、治安部隊、反対勢力から性暴力を受けやすいと報告している¹¹⁴。
- ダルフル危機の間、料理や収入を得るために薪を集める際、月に推定200人の女性と女の子がレイプや殺害された¹¹⁵。

その他の問題

- 脆弱な子どもの集団は、**食料援助を受ける際に差別に直面する可能性がある**。マラウイでは、すくい上げボランティアが、UASCやその他の脆弱な集団の食料をすくい上げていなかったことが報告されている¹¹⁶。
- 障害を持つ子ども**は、食料支援を利用する上で、特別な障壁に直面するかもしれない。中央アフリカ共和国では、87%の障害者が、非食料品の配布、食料、現金へのアクセスが困難であると報告した。障害者が少なくとも1人いる世帯は、そうでない世帯に比べ、食料が確保されている可能性が低く(24%に対し20%)、深刻な食料不足に陥っている世帯が2倍多かった¹¹⁷。

食料不安と思春期の女の子

思春期の若者の保護と幸福は、食料不安から強い影響を受けるが、FSとCPの両対応において、思春期の若者は見過ごされがちである。人道的対応は、思春期の若者特有のニーズと能力を慢性的に見落としている¹¹⁸。

食料危機の間、思春期の女の子はいくつもの困難に直面する。彼女たちは家族の食料生産と準備で重要な役割を果たし、幼い子どもや他の家族のために食事を犠牲にし、教育を犠牲にする。思春期の女の子はまた、生計を立てる機会や正規雇用へのアクセスも少なく、同世代の男性に比べて収入も少なく、仕事に対する評価も低い。このことは、有害なジェンダー規範や、利用可能なサービスや社会的セーフティネットの欠如とともに、思春期の女の子を、性的搾取、早すぎる結婚、武装勢力や武装集団による徴用や利用といった、否定的な対処メカニズムの危険にさらしている。

111. Bermudez et al. "Safety, Trust, and Disclosure: A Qualitative Examination of Violence Against Refugee Adolescents in Kiziba Camp, Rwanda," *Social science & medicine* (1982) 200 (2018): 83–91.

112. Save the Children, April 2017, "Child protection needs assessment Somalia".

113. Logie, et al. "Exploring Resource Scarcity and Contextual Influences on Wellbeing Among Young Refugees in Bidi Bidi Refugee Settlement, Uganda: Findings from a Qualitative Study," *Conflict and health*.

114. Ellsberg et al. "If You Are Born a Girl in This Crisis, You Are Born a Problem": Patterns and Drivers of Violence Against Women and Girls in Conflict-Affected South Sudan. *Violence Against Women*.

115. Women's Commission for Refugee Women and Children. *Finding Trees in the Desert: Fuelwood Collection and Alternatives in Darfur 2006*.

116. Plan International Malawi. *Integrated CP-SGBV and Food Security Case Study*.

117. WFP, *Disability and food security: Central African Republic – Findings from the 2020 ENSA disaggregated by disability*, August 2021.

118. Plan International, *Adolescent Programming Toolkit: Guidance and Tools for Adolescent Programming and Girls' Empowerment in Crisis Settings*, June 2020.

04

CPとFS
の専門家
がどのよう
に連携し
ているか



一家の避難所の外で皿洗いをする
15歳、モザンビーク。
©PLAN INTERNATIONAL

家族の畑で植物の世話をする15歳の女の子、ブルキナファソ。

©PLAN INTERNATIONAL



CP、保護、FSの各分野で活動するKIIに、CPとFSのアクター間の協働の経験、具体的にどのような活動を行ったか、また、強力な協働のための前提条件や有望な実践例を特定できるかどうかを尋ねた。

全体として、KIIは、CPとFSのアクター間の強い協力関係を報告しなかった。

- CPとFSの両方のプログラムを持つ、子どもに焦点を当てた組織のKIIは、組織的な協力が最も強いレベルであったと報告している。これは、子どもの保護方針の存在、既存の多部門にまたがるプログラムモデルや枠組み、両部門の技術的専門知識、CPに関するスタッフへの定期的な訓練などに起因している。
- 何人かのKIIは、連携はCPとFSの担当者間の個人的な関係に左右されること、また、保護やFSのスタッフがCP部門で働いたことのある専門知識や経験を持っているかどうかによって左右されることを提起した。
- あるKIIは、GBVリスク軽減や障害者包摂といった他の分野は主流化の必須分野と見なされているが、CPへの配慮はそうではないと指摘した。
- 複数のKIIは、彼らの組織ではこの分野は新たな関心事ではあるが、CPとFSを統合した具体的なプログラムや、成果を評価したプログラムについては知らなかったと述べた¹¹⁹。
- 2人の回答者は、この分野を探求することに関心を示してはいるものの、組織内、あるいは組織と他の機関や調整機構との間で、現在協力が進行していることは把握していない。

実践例

複数のKIIが、CPとFSのアクターが現在協力している具体的な行動を報告した。

- CPRリスク、保護措置、CP事例の特定に関する、CPアクターによるFS職員の研修
- CP事例管理のために、FSチームがCPアクターに紹介する
- FS活動中に保護者や世帯主に対するCPRリスクに関する啓発活動
- 脆弱性基準の共同策定と食料援助を受ける受益者の選定(CPの配慮を世帯基準に組み込む)
- 食料不安世帯の潜在的CPRリスクのスクリーニング

119. FSとCPを統合したプログラムの例を尋ねたところ、栄養とCPの例、特に5歳未満の子どもの保護者を対象としたプログラムの例を挙げたKIIもいた。また、ある団体では、プログラムを立ち上げているが、まだ成果が出ていないという事例もあった。

- 合同家庭訪問の実施
- 年上の思春期の若者を対象とした生計介入
- 子どもに配慮した配給を通じて、食品配給におけるCPリスクを軽減する

協力への障壁

KIはまた、CPとFSのアクター間の協力における問題点も明らかにした。

- CPとFSのプログラムは、地理的に異なる場所で計画されている場合があり、紹介を行う能力が制限されている。例えば、FSの対象が地理的地域に限定されている場合、その地域外に住む子どもは援助を受ける資格がない。
- 対象基準にCPへの配慮が含まれていても、子どもや家族が援助を受けるための基準を満たすことはほとんどない。
- CP紹介の経路が極めて脆弱である場合がある。FSプログラムが行われている地域には、CP専門アクターや専門サービスが存在しない場合があり、FSプログラムがCPリスクを特定したり文書化したりすることを妨げている。
- CPとFSの両方の介入を含むプログラムでは、共同の成果や、プログラムが特定のCPリスクを軽減できたかどうかを測定することはほとんどない。例えば、KIはCP指標を測定した学校給食プログラムを知らなかった。
- FSアクターは、CPを非常にデリケートで複雑な分野と認識している可能性がある。FSアクターは、能力不足、加害行為、特定されたCPリスクへの対応能力不足を懸念し、評価や計画作成に子どもを参加させることをためらうかもしれない。
- プロジェクト参加者、リーチ、資金価値の二重計上に関するドナーの懸念も障壁として挙げられた。あるKIは、ドナー側が、リーチ数の合計を増やし、金額に見合う価値を高めるために、異なる場所でプログラムを実施することを望んでおり、それが同じ場所でCPとFSのプログラムが重複することを制限していると指摘した。別のKIは、FSの介入が別のドナーから提供されているにもかかわらず、「二重計上」を理由に、既にFSのプログラムを受けているコミュニティにCPのサービスを提供するプログラムに資金を提供したがるドナーがいると報告した。

優良事例

CP部門とFS部門の協力のための優良事例は

- CPとFSのアクター間の定期的な会合と情報共有(ニーズ調査の結果や計画された介入策の共有を含む)。
- CPに関する定期的な研修を実施し、CP事例管理への紹介を促進する。
- CPリスクの要因として食料不安を浮き彫りにするために、文脈に特化した証拠を用いる。
- CPとFSの介入の詳細なマッピングを作成し、パートナーが脆弱な子どもや家族に紹介できるよう、他部門の利用可能なサービスや支援を把握できるようにする。
- CPリスクのある子どもと家族がFSの支援を受けられるようにするため、FSプログラム参加者の一定数または一定割合をCP事例用に確保する合意。
- 子どもや家族が既存のFSプログラムを受けられない場合、CPプログラムにIGAや無条件のCVAなどの介入策を導入する。
- ICCGなど、CPの重要性とCPとFSの関連性についての認識を高めるため、さまざまな個人やフォーラムを特定する。
- CP AoR コーディネーターと食料安全保障クラスターのコーディネーターが、プログラムの統合を提唱するために協力した。あるKIは、共同での提唱活動を通じて、ある人道支援基金に影響を及ぼし、CPやFSのプログラム案が、その地域の他のアクターとどのように連携するかを示すよう、申請者に求めることができたと言った。
- CPとFSの統合を、権利保護の原則、AAP、PSEAHといった他の人道政策やアプローチと関連付ける。

例

CPをFSデータ収集に統合する

マリでは、*Enquete Nationale sur la Securite Alimentaire et Nutritionnelle*というFSと栄養評価が年2回実施されている。2018年、WFPのVAMチームとCPの同僚は、既存のデータ収集アンケートを調整し、CPリスクに関連する否定的な対処戦略を探る質問を含めた。これには、早すぎる結婚、児童労働、UASCや孤児の存在などが含まれた。これにより、食料不安とCPリスクとの関連性を補完的に分析することが可能となった¹²⁰。

中央アフリカ共和国において、プラン・インターナショナルとWFPIは、思春期前期の若者（10～14歳）と思春期後期の若者（15～17歳）を対象に、24回のフォーカス・グループ・ディスカッションと12回の参加型アクティビティを実施し、様々なCP問題の要因と、食料不安が家族の対処メカニズムにどのような影響を与えるかを調査した。思春期の若者は、保護者が、食料を購入するための収入を得るために危険な仕事を引き受けるよう彼らに働きかけ、重要な役割を果たしたと報告した。特に思春期の女の子は、保護者によっては一家の食料確保に貢献するために娘に交際を勧めていると報告した。十分な資源の欠如、雇用の欠如、貧困が、早すぎる結婚、武装集団との関わり、危険な仕事の要因であると考えられている¹²¹。

マラウイでは、WFP、UNHCR、マラウイ政府、イエズス会難民サービス、FEWSNET、プラン・インターナショナルからなる複数利害関係者のJAMが、2016年12月にDzaleka難民キャンプとLuwani難民キャンプで実施された。JAMの一環として定期的に収集されているFSと栄養のデータに加え、CPとGBVIに関連する追加の質問が評価に含まれた。JAMIは、性的搾取、早すぎる結婚、物乞い、危険な仕事など、食料不安によって深刻化するいくつかの負の対処メカニズムを発見した。食料配給の場が、子どもが暴力、性的搾取、窃盗などのリスクにさらされる場であることも確認された。JAMIによって、チームは、食料不安の影響と、コミュニティへの食料支援の提供方法の両方に対処するための、一連の軽減策を策定することができた¹²²。

例

食料援助の対象となるリスクの高い世帯の優先順位付け

シリアでは、早すぎる結婚と児童労働がCPの重要な懸念事項である。Mercy Corps's SyriaによるFS事業において、FS担当者はプロテクション・アドバイザーと共に、CPのリスクと関連する警告指標を特定することを目的とした登録ツールを開発した。このツールは、食料支援を受ける家族の登録時に使用され、家庭内で働く子どもの数、子どもが働き始めた年齢、子どもが最近学校を中途退学したかどうか、早すぎる結婚のリスクが最も

高い年齢範囲にある子どもがいるかなどの指標に関する情報を収集した。その結果に基づいて、現金援助を受けるべき家庭の優先順位と、算出された援助のレベルが決定された。緊急のCPリスクが確認された場合は、追跡調査のために他のCP関係者に照会された。

120. Global Child Protection Area of Responsibility and WFP VAM. Mali Case Study.

121. Plan International Central African Republic, Rapport: Consultation des adolescents sur la securite alimentaire et la nutrition dans les regions/provinces de Bangui, Zemio, Bria, Berberati, Kaga-Bandaro et Bossangoa, RCA, 2021.

122. Plan International Malawi, Integrated CP-SGBV and Food Security Case Study.

例

FSと生計プログラムを通じて子どもの幸福を向上させる

ナイジェリア北東部のボルノ州で、Street Child of NigeriaはFSと生計プロジェクトを立ち上げた。6ヶ月間のプロジェクトでは、ホストコミュニティ、帰還民、非正規のIDPの700世帯を対象に、生計補助金、ビジネス訓練、食費の現金支給などの支援を行った。参加世帯を選ぶために、コミュニティ関係者は、不就学の子どもがいる世帯を含む脆弱性基準の作成に携わった。毎週行われるVSLAの会合の後で、世帯主たちはCPIに関する啓発セッションを受けた。CPIリスク、前向きな子育てのスキル、ジェンダー平等、性的搾取や虐待に対する保護と予防に関する情報を含むメッセージが伝えられた。コミュニティヘルプデスクとプロジェクト管理委員会も設置され、CPIに関する懸念事項の特定と照会が行われた。

プロジェクトは、基準時点と終了時点で、子どもの幸福度評価を実施した。主な調査結果は以下の通りである。

- ホストコミュニティの子どもも、IDPコミュニティの子どもも、「保護者とたいていうまくいっている」と報告している。ホストコミュニティの子どもではベースライン時の55%から最終ライン時には78%に、IDPコミュニティの子どもでは63%から80%に。
- すべての世帯で、子どもの就学率が上昇した。これは、実子と、その家庭で養育されている他の子どもの両方に見られた。また、測定の対象にはならなかったが、就学率が高まったことで、物乞いや物売りなどの仕事への参加率が低下したと考えられる。
- ホストコミュニティの子どもも、IDPコミュニティの子どもも、「体調が悪い」ことが大幅に減少した。これは、食料の入手可能性が高まったことと、保健サービスを利用するための経済的手段が増えたためであろう¹²³。



ケニアのある母親とその子どもは、ほとんど食べるものがない。

©PLAN INTERNATIONAL

123. Street Child of Nigeria, Street Child 2019-2020 WFP Project Impact Assessment, May 2020.

FSプログラムはCPを促進できるか？

証拠の検証では、FSプログラムや食料不安に苛まれる世帯を対象としたプログラムに関連するCPの成果を測定し、厳密に評価されたプログラムの例を特定しようとした。数少ない調査結果が確認された。検証を通じて確認されたのは、身体的・精神的暴力、IPV、児童労働、早すぎる結婚といったCPの結果に関連するものであった。今後より多くの証拠と体系的な分析が必要である。

身体的・精神的暴力

食料支援と家族強化介入を組み合わせることで、子どもに対する身体的・精神的暴力が減少する可能性がある。

- ジンバブエ政府による「調和型社会現金給付プログラム」の影響評価によると、食料貧困世帯への無条件現金給付は、食料不安の軽減と孤児や脆弱な子どもの保護を目的としており、実施4年後には食料購入の増加と身体的虐待の減少につながった。現金支援は、支払い窓口での啓発活動、CPIに関する懸念を報告しCP機関に事例を紹介するヘルプデスクなどのCPサービスと組み合わせられた。調査によると、世帯収入と食料へのアクセスが改善されたことで、保護者の幸福度が向上し、児童労働が減少した可能性もある。
- タンザニアの農民集団を対象としたプログラムのRCTでは、農業ビジネスと子育てプログラムを受けた村の子どもは、全体的な虐待の減少を報告した；子育て介入のみを受けた村の子どもも、効果は小さいものの、子どもの虐待を減らすことができたという。

IPV

食料支援はIPVを減少させるかもしれない。

- エクアドル北部におけるWFPのプログラムは、コロンビア難民と貧しいエクアドル人のFSと栄養のニーズに対応し、家庭の意思決定における女性の役割を改善することを目的としていた。RCTによると、給付によってIPVも約19～30%減少した。給付の種類(現金、バウチャー、食料)による有意差は見られなかった¹²⁴。

早すぎる結婚

FSプログラムは、他の要因にもよるが、早すぎる結婚の阻止・遅延が可能である。

- 人道的な状況において、現金給付が早すぎる結婚の阻止や軽減に役立つかを調べた厳密な調査は見つかっていない。家計の経済的安定に関する無条件の現金給付や条件付現金給付(教育を条件とする)が、早すぎる結婚を減らすことができるという証拠は限られており、特に貧困が早すぎる結婚の要因となっている、現金給付が定期的で予測可能である、早すぎる結婚に対する社会的規範が弱い、といったような場合にそのようなことが起こりうる¹²⁹。
- 現金給付を行うエチオピアの公共セーフティネット・プログラムは、現金給付によって成人の経済的労働が増加し、その結果、女の子が家庭での労働により従事する必要があり、結婚を遅らせることがわかった¹³⁰。
- 学校給食プログラムは、就学率を平均9%向上させることがわかっている。教育水準の向上と早すぎる結婚の減少には強い相関関係がある¹³¹。

124. Hidrobo et al, "The Effect of Cash, Vouchers, and Food Transfers on Intimate Partner Violence: Evidence from a Randomized Experiment in Northern Ecuador," American economic journal, Applied economics 8.3 (2016): 284–303.

125. Aurino, et al, "School Feeding or General Food Distribution? Quasi-Experimental Evidence on the Educational Impacts of Emergency Food Assistance during Conflict in Mali," UNICEF Office of Research, Innocenti Working Paper, June 2018.

126. Ravallion et al, "Does Child Labour Displace Schooling? Evidence on Behavioural Responses to an Enrollment Subsidy," The Economic journal (London) 110.462 (2000): 158–175.

児童労働

学校給食プログラムは、子どもの労働参加を減少させるかもしれない。家計の農業生産性を向上させることを目的としたプログラムは、子どもの労働参加を増加させる可能性がある。

- マリでの調査では、学校給食は女の子の農業や家畜飼育に関する仕事への参加を約10ポイント減少させることがわかった；これは女の子の就学率の増加にも見られた。一方、学校給食は男子の労働参加を減少させず、就学率も増加させなかった。同じ調査で、一般的な食料配給は、男の子も女の子も、農作業、家畜飼育、家事関連の仕事に従事する確率を高めることがわかった。調査では、この影響は女の子よりも男の子の方がかなり大きく、男の子は女の子に比べて労働活動に参加するのが20%も増加することがわかった。調査者は、特に紛争や干ばつの影響を受けている地域では、農作業や家畜飼育活動における男の子の役割の重要性を考えると、食料援助の恩恵は、彼らの労働への参加を減らすには十分ではなかったと結論づけた¹²⁵。
- バングラデシュの食育プログラムでは、1カ月間に全授業の95%以上に出席しなければならない小学生に、毎月持ち帰りの配給が行われた。このプログラムは、就学率と児童労働の減少の両方に良い影響を示したが、調査者は、児童労働の減少が就学率の増加に占める割合はわずかであり、親が子どもの時間を他の活動に使っていることを示唆していると指摘した¹²⁶。
- ブルキナファソの地方で、持ち帰りの配給を受けた女の子と学校給食を受けた生徒の集団で、児童労働が減少したかを調べた調査がある。持ち帰り配給を受けた女の子は、農作業と非農作業の経済活動が9ポイント減少したが、学校給食を受けた生徒には差が見られなかった。この調査では、持ち帰り配給と学校給食の価値の差は調べていないため、この差があったかどうかは不明である¹²⁷。
- エチオピアのPublic Safety Netプログラムは、慢性的な食料不安のある地域の世帯を対象とし、労働集約的な労働に従事する労働年齢の世帯員一人一人に30日間の労働を与えた。6～10歳の子どもは、家事と農業活動の両面で労働の減少を経験した。公共事業プログラムが農業生産性の向上を目的とした給付と組み合わせられた場合、幼い女の子（6～10歳）は、特に家事において、週当たりの労働時間が増加した¹²⁸。

127. Kazianga et al, "Educational and Child Labour Impacts of Two Food-for-Education Schemes: Evidence from a Randomised Trial in Rural Burkina Faso," *Journal of African economies* 21.5 (2012): 723–760.

128. Hoddinott et al, "The Impact of Ethiopia's Productive Safety Net Programme and Related Transfers on Agricultural Productivity," *Journal of African economies* 21.5 (2012): 761–786.

129. Girls Not Brides, How cash transfers contribute to ending child marriage: Review and synthesis of the evidence. December 2021.

130. Ibid.

131. WFP, The Impact of School Feeding Programmes, November 2019.

05

議論

植え付けの準備をする母親を手伝う幼い女の子、
グアテマラ。

©PLAN INTERNATIONAL

FSは子どもの保護と幸福に不可欠である。

食料不安だけで、子どもが暴力、虐待、ネグレクト、搾取を経験するリスクが決まるわけではないが、この証拠検証では、食料不安が複数の CP リスクに関連していることがわかった。子ども自身は、食料への一貫したアクセスや食生活の多様性など、FSは子どもの保護と幸福に直接影響すると報告している。食料不安は、子どもと保護者の心理社会的苦痛を引き起こし、その結果、家庭、学校、コミュニティ内の緊張と暴力を増大させる。保護者のメンタルヘルスの悪化は、子どもの世話や暴力的でないしつけを行う能力に直接影響し、子ども自身の精神衛生状態にも悪影響を及ぼす。保護者は、収入を得たり、食料を探したりするためにより多くの時間を費やしたり、雇用を求めて別の場所に移動し、子どもを置き去りにしなければならないかもしれない。子どもにとって、一貫性があり対応力のある保護者との関係は、最も影響力のある保護要因のひとつであるため、このような養育レベルの低下やネグレクトは特に問題である。

食料不安は、子どもがIPV、早すぎる結婚、性暴力、性的搾取など、さまざまな形態のSGBVを経験するリスクも高める。子どもと家族はまた、食料と生計の機会へのアクセスを増やすために、家族離散、児童労働、早すぎる結婚などの否定的な対処メカニズムに頼ることもある。

食料不安が子どもの保護と幸福に及ぼす影響もまた、貧困、ジェンダーと社会規範、利用可能な社会的支援とサービスと密接に絡み合っている。農業生産における役割を考えると、男の子は児童労働のリスクが高いかもしれないが、女の子は、その価値、生計機会の欠如、食料調理の伝統的役割の認識から、早すぎる結婚、性的搾取、性暴力を経験する可能性が高い。子どもの年齢、ジェンダー、能力、社会経済的地位、家庭環境は、FSに影響を与えるだけでなく、利用可能な対処戦略にも影響を与える。子ども自身も、雇用、結婚、移住など、生涯を通じて食料不安に対処するために、さまざまな対処戦略を用いている¹³²。

食料不安がCPの成果に及ぼす影響は、周期的である。ある種類の暴力を経験した子どもは、他の種類の暴力を経験するリスクが高まる。食料不安に対処した結果結婚した女の子は、IPVを経験するリスクが高く、後で結婚した女の子よりも高い割合で栄養不良を経験する。IPVを経験した家庭で育つ子どもは、暴力を目撃し、自らも暴力を経験する可能性が高く、また、低出生体重を患い、栄養状態が悪く、小児期を通じて発育阻害の割合が高くなる可能性が高い¹³³。

全体として、CPに関連する結果に対する様々なFSの介入の有効性に関する証拠は、限定的だ¹³⁴。既存の証拠は、FSの介入が、特にCPの介入と結びついている場合に、CPの結果にプラスに寄与することを発見している。FSや生計支援と家族強化を組み合わせさせたプログラムは、保護者による子どもの暴力や虐待の経験を減少させることが判明している。家計全体の脆弱性を軽減したり、農業活動に関連する技術を向上させることを目的としたプログラムは、児童労働を減少させることが示されている一方で、成人世帯員の労働市場への参加を増加させることを目的としたプログラムは、意図せずして子どもや思春期の若者の労働への需要を増加させる可能性がある¹³⁵。例えば、女性の保護者が労働スキームに参加するために、女性は家事を担う娘に頼るかもしれない。その他の懸念としては、保護者が経済活動に費やす時間が増え、子どもの世話に関与するレベルが低下することが挙げられる¹³⁶。子どもたちはまた、食料配給地点の列に並んだり、配給物資を売って追加収入を得たり、大人の世帯員が配給物資を集めている間に追加の家事をしたりすることにも関与する可能性がある。

CPとFSのアクター間の協力は、様々な理由から依然として限定的である。その理由には、運営上の障壁、資金調達の限界、技術的リソースやツールの不足、統合プログラムのための証拠に基づくプログラムモデルの欠如などがある。優良事例の出現により、CPとFSの関係者が、子どもにとって有益な結果を促進するために、よりよく協力できる方法がいくつか示されている。

132. Morrow et al, "I started working because I was hungry": The consequences of food insecurity for children's well-being in rural Ethiopia, *Social Science & Medicine*, Volume 182, 2017, Pages 1-9.

133. Glinski et al, *The Child, Early, and Forced Marriage Resource Guide* Task Order, Banyan Global, 2015.

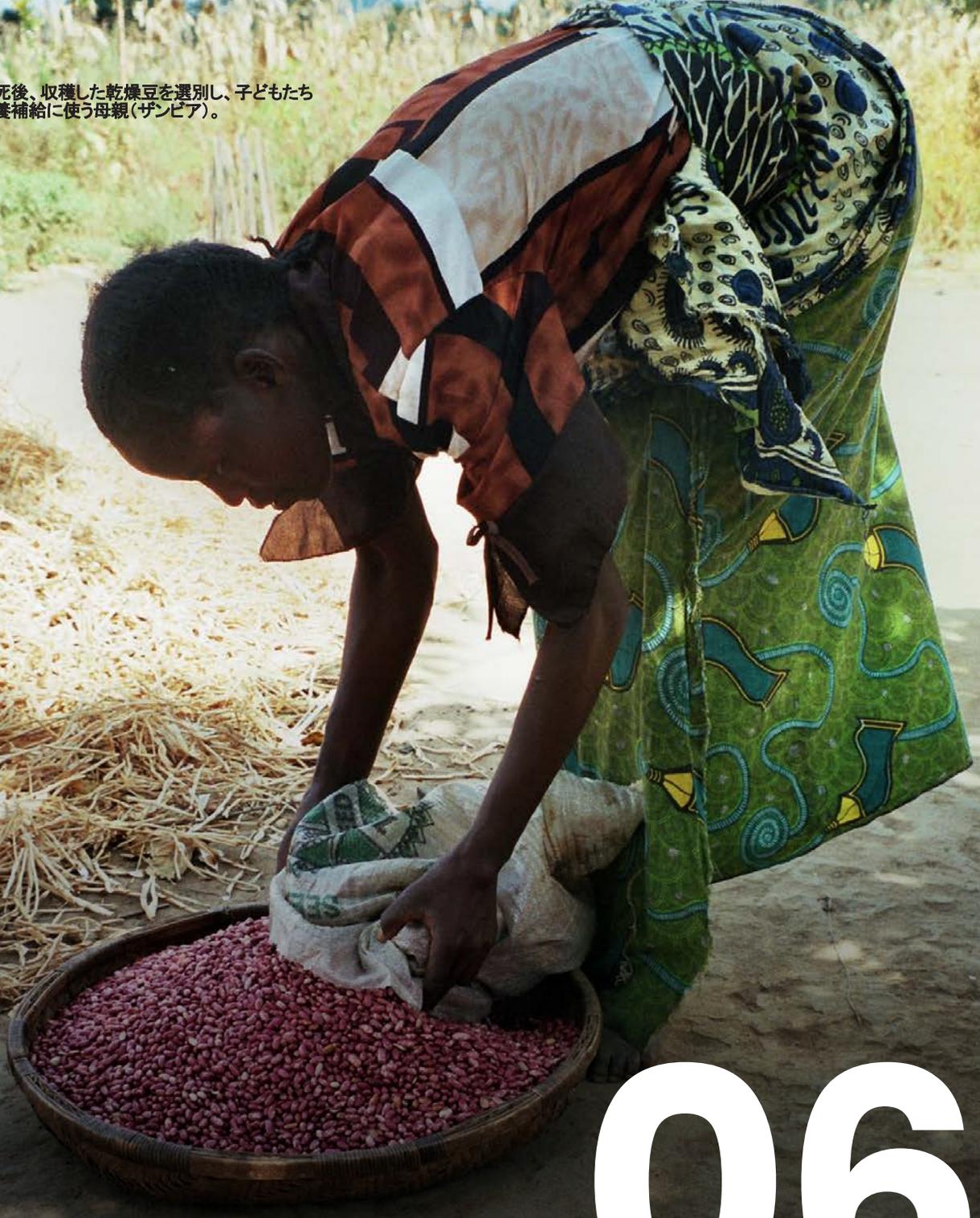
134. Aurino et al, "School Feeding or General Food Distribution? Quasi-Experimental Evidence on the Educational Impacts of Emergency Food Assistance during Conflict in Mali," UNICEF Office of Research, Innocenti Working Paper, June 2018.

135. Dammert, Ana C et al. "Effects of Public Policy on Child Labor: Current Knowledge, Gaps, and Implications for Program Design." *World Development* 110 (2018): 104-123.

136. International Rescue Committee, *Child Labor: What Works Towards addressing Child Labor in IRC Relevant Contexts: An Evidence Review*, April 2021.

提言

夫の死後、収穫した乾燥豆を選別し、子どもたちの栄養補給に使う母親(ザンビア)。



06

提言

以下の提言は、各国政府、ドナー、国連機関、INGO、NGO、そして CP や FS の分野で活動する市民社会アクターを含む人道的アクターに適用可能である。

プログラム 周期	ドナーへの提言	CPアクターへの提言	FSアクターへの提言
準備	<ul style="list-style-type: none"> FSにおける子どもの役割と潜在的な負の対処メカニズムを理解するための分析と調査を支援すること。 食料不安と飢饉のような状況が予測される場合、CPの予防と緩和を含むCPサービスへの資金提供が、FSと並んで優先されるようにすること。 	<ul style="list-style-type: none"> 利用可能性、アクセス、活用など、FSにおける危機以前の子どもの役割を理解すること。 食料不安に苦しむ子どものための社会的保護制度、CPに関連する文化的・社会的規範、伝統的な対処メカニズムを理解するために、マッピングや調査を実施すること。これらの活動には、可能な限り子ども、家族、義務を負う者を参加させ、彼らの意見が含まれるようにすること。 CPとFSのアクター、家族、コミュニティが、CPと食料不安との関連性を認識し、CPの潜在的リスクに関する早期警告システムを開発するようにすること。 	
評価	<ul style="list-style-type: none"> FS評価に子どもや思春期の若者の声を取り入れる参加型データ収集ツールの使用を奨励すること。 CPとFSのデータを一貫して年齢、ジェンダー、障害別に集計するよう奨励すること。 FSとCPのリスクとニーズを合同分析する取り組みを支援すること。 	<ul style="list-style-type: none"> 共同分析や統合的なプログラムを開発するために、共同評価を計画したり、似たような場所で評価が重なるように調整したりすること。 季節的な出来事やショック時を含め、食料不安の子どもへの影響やCPリスクを考慮するために、既存の評価とデータ収集ツールを強化すること。 すべての評価とデータ収集が年齢、ジェンダー、障害別に細分化されていること。主要な年齢群別(5歳未満、6~9歳、10~14歳、15~17歳)にデータを集計することを検討すること。 食料不安に関連するCPリスクに対して思春期の若者が特に脆弱であることから、彼らに特に注意を払いつつ、ジェンダーと年齢層別にリスクを特定し、理解すること。 可能で安全であれば、子ども、特に思春期の女の子と男の子を評価に参加させ、彼らの意見と優先事項を調査結果に反映させることを検討すること。 	<ul style="list-style-type: none"> JAMとEFSAIにCPへの配慮を含めることを検討すること。 心理社会的苦痛、早すぎる結婚、性的搾取、子どもに対する身体的・精神的暴力などのCPリスクを含め、食料不安とCPの関連性をよりよく捉えるために、経験に基づく既存の対処戦略指標を適応させること。 FSの全職員が、CP、子どものセーフガード、PSEAHの基本的概念について研修を受けるようにすること。
		<ul style="list-style-type: none"> CPとFSの収集データの共同データ分析を実施すること。 評価結果を互いに共有し、共同分析を行うこと。 	

プログラム 周期	ドナーへの提言	CPアクターへの提言	FSアクターへの提言
評価(続き)		<ul style="list-style-type: none"> 重要な CP 情報と評価結果が FS 調整機構と共有されるようにすること。 	<ul style="list-style-type: none"> 早期警戒システムやFS監視システムからの主要なFS情報や報告がCP調整機構と共有されるようにすること。
計画と設計	<ul style="list-style-type: none"> FS危機の発生時に、CPプログラムへの資金提供を優先すること。 予防、緩和、対応活動の相互補完を促進するため、地理的に重複する地域の CP プログラムと FS プログラムに資金援助すること。 CP とFS のプログラムが、どう調整され、リスク下の、食料不安のある子どもや家族を対象とするのかを、提案書で示すよう、CP および FS のアクターに奨励すること。 子どもの保護と幸福を促進するために、CPとFSを統合するプログラムの枠組みと証拠に基づくモデルの開発を支援すること。 子どもと家族の食料へのアクセスを促進し、CPリスクを軽減するため、国の社会保護制度への資金拠出を拡大すること。 CPとFSへの対応の枠組みの中で、食料不安にある子どもと保護者のためのPSSプログラムを拡大すること。 	<ul style="list-style-type: none"> すべての人道活動の出発点として、子どもの保護と幸福を活用すること。 CP 評価と FS 評価および監視システムから得た情報を、CPとFSのプログラム計画のために利用すること。 CPとFSのプログラムを地理的に重複する地域で計画し、脆弱で食料不安のある子どもと家族がCPやFSの支援サービスを利用できるようにすること。 CP とFS の調整機構と調整し、CP とFS の紹介経路と SOP を策定する。GBVおよびMHPSSのアクターと協力し、GBVおよびMHPSSの紹介経路も確立すること。 食料不安の状況における CP リスクに対処するための戦略を策定すること。これには、食料の増産や準備、負の対処メカニズムに関連する CP リスクに対処する方法を含むこと。 食料探しや薪・水集めに伴う子どもの性的搾取や性暴力のリスクを低減・軽減する戦略を拡大すること。エネルギー効率の高い調理用コンロ、太陽光照明、地元で入手可能な貯水タンクやフィルターなど、代替エネルギー源の配布を検討すること 児童労働や性的搾取などの CP リスクに対処するために、子どもや思春期の若者を対象とした CP やエンパワーメントプログラムの一環として、FS や生計介入を提供することを検討すること。このような介入は、年上の思春期の若者や保護者を対象とする場合もある。 CP 事例管理、生活技能やPSS、コーチングやメンタリング、保護者への子育て支援など、CVAと並行して補完的なアプローチを提供する現金+プログラムを検討すること。 有害なジェンダー規範が CPリスクの要因であることを認識し、CPとFSの両方のプログラムを通じて、肯定的なジェンダー規範を促進するジェンダー・トランスフォーマティブ・プログラムを設計すること。 CP事例の特定と紹介を支援するため、食料配給場所に子どもに配慮したヘルプデスクを設置すること。 	<ul style="list-style-type: none"> CP および FS 評価報告書において、食料不安と CP リスクの関連性を強調すること。

プログラム 周期	ドナーへの提言	CPアクターへの提言	FSアクターへの提言
計画と設計 (続き)		<ul style="list-style-type: none"> 食料不安のある家庭の保護者に特に注意を払いながら、食料不安の地域でPSSの介入に的を絞ること。 子どもや保護者のための PSS を拡大するために、コミュニティレベルの CP や FS の機構と協力すること。 飢餓の季節の前や最中に急性食料不足に見舞われる地域や、食料援助が削減される地域では、プログラムの規模を拡大することを検討すること。 前向きな子育ての訓練を含む家族強化のための介入を、FSプログラムの保護者や世帯主に拡大し、FS介入へのアクセスを促進すること。 就労可能な最低年齢以上の思春期の若者が利用できる、安全で適切な仕事の種類を特定する。 早すぎる結婚などCPリスクのある年上の思春期の若者が、自らの生産性を向上させ、自らの保護と幸福を促進するために、農業訓練、情報、資源を利用できるようにすること。 FS プログラムに思春期の若者を参加させる際には、ジェンダーや年齢特有のニーズ、リスク、社会規範を考慮すること。 思春期の女の子と男の子では、安全かつ公平にFSや生計向上プログラムに参加するために、異なる規定が必要になるだろう。 	<ul style="list-style-type: none"> 既存の指針と優良事例を活用し、子どもに配慮した食料支援配布のための主要な行動を実施すること。指針としてはFSとCPに関する CPMS Standard 21や、人道支援活動にGBV介入を統合するための IASC Guidelines for Integrating GBV Interventions in Humanitarian ActionおよびFSと農業、プラン・インターナショナル CP Mainstreaming Briefing Paper for Distributionsなどがある。
		<ul style="list-style-type: none"> 年上の思春期の若者を対象とした生計プログラムを、PSS、ライフスキル、安全な場所、CP事例管理への紹介と連携させること。 	<ul style="list-style-type: none"> 生計の機会を思春期の若者やユースの参加、市民参画の機会と結びつけ、彼らの発言力と主体性を拡大すること。 早すぎる結婚やその他のCPリスクに瀕する女の子を、農業生産性プログラムや代替的な収入を得る機会に組み入れ、女の子を経済的負担として見る保護者の見方を転換させ、ジェンダー平等を促進する介入策と組み合わせること¹³⁷。

137. Glinski et al, The Child, Early, and Forced Marriage Resource Guide Task Order, Banyan Global, 2015.

プログラム 周期	ドナーへの提言	CPアクターへの提言	FSアクターへの提言
実施	<ul style="list-style-type: none"> フィードバックや苦情処理などの説明責任の仕組みが、子どもや思春期の若者に配慮したものであり、子どもやユースの意見を組み込んだものであることを示すよう、すべての関係者に求めること。 PSEAHと子どものセーフガードへの配慮が、すべての人道支援プログラムとプログラム周期を通じて盛り込まれているようにするための要件を含めること。 	<ul style="list-style-type: none"> すべての脆弱な子どもと家族がCPとFSのサービスを利用できるよう、CPとFSのアクターと調整すること。 CPとFSの選定基準にCPとFSの両方の考慮事項が含まれるようにするため、共同対象基準と脆弱性基準を策定すること。 	<ul style="list-style-type: none"> FSプログラムが非常に脆弱な子どもや家族を除外する場合、対象基準を拡大または調整すること(例えば、FSの対象が地理的または人口統計的な対象に基づいている場合)。
		<ul style="list-style-type: none"> CPおよびFSプログラムの対象および選択基準の設定に、家族やコミュニティを参加させること。 対象の基準が、スティグマや差別、子どもの更なる安全への懸念につながらないようにすること。 対象者決定がCPリスクの「引き寄せ要因」にならないようにする。例えば、児童労働またはCHHが援助の主な適格基準である場合こと。 第一線で働くCPとFSの職員全員を対象に、食料不安の子どもの特定と紹介、子どものセーフガーディングおよびPSEAHについて研修を行うこと。 	<ul style="list-style-type: none"> FSの全職員が、食料不安に苛まれ、危険に瀕する子どもや家族が利用できるCPプログラムを知っているようにすること。 潜在的なCPリスクを特定するために、CPアクターと協力して受入書式を適合させること。
		<ul style="list-style-type: none"> 全CP職員が、食料不安のある子どもや家族が利用できるFSプログラムを知っているようにすること。 	
			<ul style="list-style-type: none"> 子どもと家族がCPとFSに関する重要なメッセージを受け取り、情報が子どもや思春期の若者に合わせた適切なものであるようにすること。

プログラム 周期	ドナーへの提言	CPアクターへの提言	FSアクターへの提言
実施(続き)		<ul style="list-style-type: none"> • CFSやライフスキルプログラムなどの CP 介入に参加する子どもや思春期の若者が、FS プログラムやサービスに関する情報を入手できるようにすること。 	<ul style="list-style-type: none"> • FS活動中に、CPリスクと利用可能なサービスに関する情報を提供すること。 • FSプログラムと利用可能な支援に関する情報が、既婚の思春期の女の子、CHH、UASCを含む子どもや思春期の若者にもアクセスできるようにすること。
監視と評価	<ul style="list-style-type: none"> • CPと不安との関連性を理解するため、また証拠に基づくCP-FS統合プログラムモデルを理解するための証拠基盤の拡大を支援すること。 • 子どもの保護と幸福に対するFSプログラミングの影響を測定するため、主要指標と実用的なツールの試験運用を含む監視の枠組みの開発を支援すること。 	<ul style="list-style-type: none"> • 流通や生計プログラムを含む FS プログラムが、意図せず CP リスクを高めていることがあるか監視すること。紹介された子どもや家族が、CP や FS のサービスを利用する上で障壁があるかを判断すること。 • 食料不安が子どもの保護と幸福にどんな影響を及ぼしているかを監視すること。 • 協力し、CP-FS プログラムを統合した結果としての CP の成果と子どもの幸福を測定すること。Child Well-being Contextualization Guideなどの既存の指針を利用すること。 • 教育アクターと協力して、学校給食プログラムが、幸福、仲間関係の改善、保護者と子どもの関係、早すぎる結婚、児童労働、その他の負の対処メカニズムの減少など、CPの結果にどのような影響を与えるかを監視し、測定すること。 • すべてのフィードバックと苦情の仕組みが、子どもに配慮され、多様な集団の女の子と男の子が利用できるようにすること。 	<ul style="list-style-type: none"> • CPへの配慮をFSプログラムの監視や PDMツールを含むツールに組み込むこと。 <ul style="list-style-type: none"> • すべてのデータが性別、年齢、障害別に集計されていること。5歳未満、6～9歳、10～14歳、15～17歳といった主要な年齢層別にデータを集計することを検討すること。

参考文献

人道活動におけるCPのための同盟。人道的環境における子どものネグレクト：予防と対応強化のための文献レビューと提言。2018年。

- Inter-Agency Toolkit: Preventing and Responding to Child Labour in Humanitarian Action. 2020.
- Minimum Standards for Child Protection in Humanitarian Action, 2019 Edition. 2019.
- Monitoring Child Protection Within Humanitarian Cash Programmes. 2019
- Understanding Risk and Protective Factors in Humanitarian Crises: Towards a Preventive Approach to Child Protection in Humanitarian Action. 2021

Amnesty International. ‘They Betrayed Us’: Women who survived Boko Haram raped, starved, and detained in Nigeria. 2018.

Aurino, Elisabetta, and Virginia Morrow. “Food prices were high, and the dal became watery”. Mixed-method evidence on household food insecurity and children’s diets in India, *World Development*, Volume 111, 2018, Pages 211-224.

Aurino, Elisabetta, Jean-Pierre Tranchant, Amadou Sekou Diallo, and Aulo Gelli. “School Feeding or General Food Distribution? Quasi-Experimental Evidence on the Educational Impacts of Emergency Food Assistance during Conflict in Mali.” UNICEF Office of Research, Innocenti Working Paper, June 2018.

Awungafac G, Mugamba S, Nalugoda F, et al. Household food insecurity and its association with self-reported male perpetration of intimate partner violence: a survey of two districts in central and western Uganda *BMJ Open* 2021;11:e045427.

Bermudez, Laura Gauer et al. “Safety, Trust, and Disclosure: A Qualitative Examination of Violence Against Refugee Adolescents in Kiziba Camp, Rwanda.” *Social science & medicine* (1982) 200 (2018): 83–91.

Bernal, Jennifer, Edward A. Frongillo, Héctor Herrera, Juan Rivera. Children Live, Feel, and Respond to Experiences of Food Insecurity That Compromise Their Development and Weight Status in Peri-Urban Venezuela, *The Journal of Nutrition*, Volume 142, Issue 7, July 2012, Pages 1343–1349.

Bernal, Jennifer, Edward Frongillo, and Klaus Jaffe. “Food Insecurity of Children Increases Shame of Others Knowing They Are Without Food.” *The FASEB journal* 29.S1 (2015).

Cardoso, L.F., Gupta, J., Shuman, S. et al. What Factors Contribute to Intimate Partner Violence Against Women in Urban, Conflict-Affected Settings? Qualitative Findings from Abidjan, Côte d’Ivoire. *J Urban Health* 93, 364–378 (2016).

Child Partnership Program Papua New Guinea, Food Security Assessment Report (Kandep-Panduaga), 6 April 2016.

Corboz, Julienne et al. “Children’s Peer Violence Perpetration and Victimization: Prevalence and Associated Factors Among School Children in Afghanistan.” *PloS one* 13.2 (2018).

Dammert, Ana C et al. “Effects of Public Policy on Child Labor: Current Knowledge, Gaps, and Implications for Program Design.” *World development* 110 (2018): 104–123.

Davies Lizzie, “Ethiopian drought leading to ‘dramatic’ increase in child marriage, UNICEF warns,” *The Guardian*, 30 April 2022.

Edwards, Ben, Matthew Gray, Judith Borja. The influence of natural disasters on violence, mental health, food insecurity, and stunting in the Philippines: Findings from a nationally representative cohort, *SSM - Population Health*, Volume 15, 2021.

Ellsberg M, Murphy M, Blackwell A, et al. “If You Are Born a Girl in This Crisis, You Are Born a Problem”: Patterns and Drivers of Violence Against Women and Girls in Conflict-Affected South Sudan. *Violence Against Women*. 2021;27(15-16):3030-3055.

FAO, IFAD, UNICEF, WFP and WHO. *The State of Food Security and Nutrition in the World 2022: Repurposing food and agricultural policies to make healthy diets more affordable*. Rome, FAO. 2022.

Girls Not Brides. How cash transfers contribute to ending child marriage. Thematic Paper 1. Review and synthesis of the evidence. December 2021.

Glinski, Allison M., Magnolia Sexton, and Lis Meyers. Washington, DC: The Child, Early, and Forced Marriage Resource Guide Task Order, Banyan Global, 2015.

Global Child Protection Area of Responsibility and WFP VAM. Mali Case Study.

Global Protection Cluster, Child Protection Working Group. Child Protection Rapid Assessment Toolkit. 2012.

Hatcher AM, Stockl H, McBride R-S, et al. Pathways from food insecurity to intimate partner violence Perpetration among Peri-Urban men in South Africa. *American Journal of Preventative Medicine*. 2019; 56:765–72.

- Hathi, Payal et al. "When women eat last: Discrimination at home and women's mental health." *PloS one* vol. 16,3 e0247065. 2 Mar. 2021.
- Hidrobo, Melissa, Amber Peterman, and Lori Heise. "The Effect of Cash, Vouchers, and Food Transfers on Intimate Partner Violence: Evidence from a Randomized Experiment in Northern Ecuador." *American economic journal. Applied economics* 8.3 (2016): 284–303.
- Hoddinott, John et al. "The Impact of Ethiopia's Productive Safety Net Programme and Related Transfers on Agricultural Productivity." *Journal of African economies* 21.5 (2012): 761–786.
- Human Rights Watch, *Marry Before Your House is Swept Away*; Child Marriage in Bangladesh, June 9, 2015.
- No way out: Child marriage and human rights abuses in Tanzania, October 29, 2014.
 - "Out Time to Sing and Play": Child Marriage in Nepal, September 8, 2016.
- Hutson, Royce A, Eileen Trzcinski, and Athena R Kolbe. "Features of Child Food Insecurity after the 2010 Haiti Earthquake: Results from Longitudinal Random Survey of Households." *PloS one* 9.9 (2014): e104497–e104497.
- International Rescue Committee, *Child Labor: What Works Towards addressing Child Labor in IRC Relevant Contexts: An Evidence Review*, April 2021.
- Ismayilova, Leyla et al. "Maltreatment and Mental Health Outcomes Among Ultra-Poor Children in Burkina Faso: A Latent Class Analysis." *PloS one* 11.10 (2016): e0164790–e0164790.
- Jackson, Dylan B., Kellie R. Lynch, Jesse J. Helton, and Michael G. Vaughn. "Food Insecurity and Violence in the Home: Investigating Exposure to Violence and Victimization Among Preschool-Aged Children." *Health Education & Behavior* 45, no. 5 (2018): 756–63.
- Jones, Andrew D. *Food Insecurity and Mental Health Status: A Global Analysis of 149 Countries*, *American Journal of Preventive Medicine*, Volume 53, Issue 2, 2017, Pages 264–273.
- Karmaliani R, McFarlane J, Somani R, Khuwaja H.M.A, Gulzar S, Saeed Ali T. et al. Peer Violence perpetration and victimization: Prevalence, associated factors and pathways among 1752 sixth grade boys and girls in schools in Pakistan. *PLOS ONE*. 2017; 12(8):e0180833.
- Kazianga, Harounan, Damien de Walque, and Harold Alderman. "Educational and Child Labour Impacts of Two Food-for-Education Schemes: Evidence from a Randomised Trial in Rural Burkina Faso." *Journal of African economies* 21.5 (2012): 723–760.
- Kuku, Oluyemisi, Craig Gundersen, Steven Garasky. *Differences in food insecurity between adults and children in Zimbabwe*, *Food Policy*, Volume 36, Issue 2, 2011, Pages 311–317.
- Laurenzi, Christina, Sally Field, and Simone Honikman. "Food Insecurity, Maternal Mental Health, and Domestic Violence: A Call for a Syndemic Approach to Research and Interventions." *Maternal and child health journal* 24.4 (2020): 401–404.
- Lentz EC, *Complicating narratives of women's food and nutrition insecurity: Domestic violence in rural Bangladesh*. *World Development* 2018; 104:271–80.
- Logie et al. "Exploring Resource Scarcity and Contextual Influences on Wellbeing Among Young Refugees in Bidi Bidi Refugee Settlement, Uganda: Findings from a Qualitative Study," *Conflict and health* 15.1 (2021): 3–11.
- Mazurana, D., Marshak, A., & Spears, K. *Child marriage in armed conflict*. *International Review of the Red Cross*, 101(911), 2019: 575–601.
- Meyer, Sarah, Elizabeth Meyer, Clare Bangirana, Patrick Onyango Mangan, Lindsay Stark. *Protection and well-being of adolescent refugees in the context of a humanitarian crisis: Perceptions from South Sudanese refugees in Uganda*, *Social Science & Medicine*, Volume 221, 2019, Pages 79–86,
- Meyer, Sarah, Laura K. Murray, Eve S. Puffer, Jillian Larsen & Paul Bolton (2013) *The nature and impact of chronic stressors on refugee children in Ban Mai Nai Soi camp, Thailand*, *Global Public Health*, 8:9, 1027–1047.
- Morrow, Virginia, Yisak Tafere, Nardos Chuta, Ina Zharkevich. "I started working because I was hungry": The consequences of food insecurity for children's well-being in rural Ethiopia, *Social Science & Medicine*, Volume 182, 2017, Pages 1–9.
- Nabulsi, Dana et al. "Voices of the Vulnerable: Exploring the Livelihood Strategies, Coping Mechanisms and Their Impact on Food Insecurity, Health and Access to Health Care Among Syrian Refugees in the Beqaa Region of Lebanon." *PloS one* 15.12 (2020).
- Nanama, Siméon, Edward A. Frongillo, *Altered social cohesion and adverse psychological experiences with chronic food insecurity in the non-market economy and complex households of Burkina Faso*, *Social Science & Medicine*, Volume 74, Issue 3, 2012, Pages 444–451.
- Ndungu, Jane, Jewkes, Rachel, Ngcobo-Sithole, Magnolia, Chirwa, Esnat, Gibbs, Andrew. *Afghan Women's Use of Violence Against Their Children and Associations with IPV, Adverse Childhood Experiences and Poverty; A Cross-Section and Structural Equation Modelling Analysis*, *International journal of environmental research and public health*, 2021-07-27, Vol.18 (15), p.7923.

Polack E. Child rights and climate change adaptation: voices from Cambodia and Kenya. In: *Children in a Changing Climate*; 2010.

Porter, Catherine et al. "The Evolution of Young People's Mental Health During COVID-19 and the Role of Food Insecurity: Evidence from a Four Low-and-Middle-Income-Country Cohort Study." *Public health in practice (Oxford, England)* 3 (2022).

Plan International. *Adolescent Girls in Crisis: Voices from the Lake Chad Basin*, 2018.

- Adolescent Programming Toolkit: Guidance and Tools for Adolescent Programming and Girls' Empowerment in Crisis Settings, June 2020.
- Adolescent Girls in Crisis: Voices Rohingya, June 2018.
- Adolescent Girls in Crisis: Voices from the South Sudan Crisis, 2018.
- Integrated Child Protection and SGBV and Food Security Case Study.
- Investing in Child Protection and GBV in Food Crisis: The Link between Food Security and Child Protection and GBV.

Plan International, Women's Refugee Commission, The Cynefin Co., *Our Voices, Our Future: Understanding child marriage in food-insecure communities in Chiredzi District, Zimbabwe*, June 2022.

Plan International Central African Republic, *Rapport: Consultation des adolescents sur la securite alimentaire et la nutrition dans les regions/provinces de Bangui, Zemio, Bria, Berberati, Kaga-Bandaro et Bossangoa, RCA*, 2021.

Ravallion, Martin, and Quentin Wodon. "Does Child Labour Displace Schooling? Evidence on Behavioural Responses to an Enrollment Subsidy." *The Economic Journal (London)* 110.462 (2000): 158–175.

Save the Children, CARE, USAID. *Titukulane Youth Needs Assessment: Finding sources of connection, learning, and earning*. May 2021.

Save the Children. *Child Safeguarding for Cash and Voucher Assistance Guidance*. 2019.

- "Child protection needs assessment Somalia", Harvard Dataverse, V1, April 2017.
- Children's Recommendations for the hunger responses in South Sudan. 2021.
- Fighting Back: Child and community-led strategies to avoid children's recruitment into armed forces and groups in West Africa.

Spears, Kinsey, Bridget Conley, and Dyan Mazurana. "Gender, Famine, and Mortality," *World Peace Foundation and Feinstein International Center, Occasional Paper #36*. December 2021.

Street Child of Nigeria. *Street Child 2019-2020 WFP Project Impact Assessment*. May 2020.

Wathen CN, Macmillan HL. Children's exposure to intimate partner violence: Impacts and interventions. *Paediatr Child Health*. 2013 Oct;18(8):419-22.

Weaver, Lesley Jo, Caroline Owens, Fasil Tessema, Ayantu Kebede, Craig Hadley, *Unpacking the "black box" of global food insecurity and mental health*, *Social Science & Medicine*, Volume 282, 2021.

WFP. *Disability and food security: Central African Republic – Findings from the 2020 ENSA disaggregated by disability*. August 2021.

- The Impact of School Feeding Programmes. November 2019.
- Protection and Accountability Policy 2020.

WFP, Inter-American Development Bank, IFAD, IOM, and Organization of American States. *Food Security and Emigration: Why people flee and the impact on family members left behind in El Salvador, Guatemala, and Honduras*.

WHO. *Global status report on preventing violence against children*. Geneva, 2020.

Women's Commission for Refugee Women and Children. *Finding Trees in the Desert: Fuelwood Collection and Alternatives in Darfur* 2006.

World Bank. *World Development Report 2011: Conflict, Security, and Development*. Washington, DC: World Bank.

World Vision. "Child Marriage and Hunger Crisis: South Sudan Case Study", 2021.

- Untying the Knot: Exploring Early Marriage in Fragile States March 2013.

UNICEF. *Hidden in plain sight: A statistical analysis of violence against children*. New York: United Nations Children's Fund; 2014

- Protection Risks for Children As A Result of Typhoon Bopha (Pablo): Inter-Agency Child Protection Rapid Assessment Report, Child Protection Sub-cluster, March 2013.



バングラデシュで菜園の手入れを
するユースグループのメンバー。

©PLAN INTERNATIONAL



表紙写真: エチオピアの自宅前の母親と子ども。©Plan International

デザイン&レイアウト: Out of the Blue Creative Communication Solutions – www.outoftheblue.co.za

この文書は、プラン・インターナショナルの緊急時CPスペシャリスト(FS)であるYang Fuによって書かれた。CPセクターとFSセクターの協働に関する経験を語ってくれた以下の仲間感謝する: Crystal Stewart, Geoffrey Pinnock, Jeannette Poules, Joy Cheung, Kevin McCarthy, Marcello Viola, Mirette Baghat, Mohammed Ibrahim Diallo, Monica Matarazzo, Paul Kinuthia, Weihui Wang。また、本報告書をレビューし、意見を寄せてくれた以下の同僚にも感謝する: Anita Queirazza, Clare Lofthouse, Jennifer Arlt, Joyce Mutiso, Laetitia Sanchez, Shannon Hayes, Sita Conklin。

グローバルCP AoRについて

グローバルCP AoRは、緊急事態にある子どもが虐待、ネグレクト、搾取、暴力から確実に守られるよう、人道的環境におけるCP活動の調整を主導している。グローバルCP AoRの詳細については、[ウェブサイト](#)をご覧ください。また、cp-aor@unicef.org までご連絡ください。

プラン・インターナショナルについて

プラン・インターナショナルは、女の子が本来持つ力を引き出すことで 地域社会に前向きな変化をもたらし、世界が直面している課題の解決に取り組む国際 NGO です。世界 75 カ国以上で活動。世界規模のネットワークと長年の経験に基づく豊富な知見で、弱い立場に置かれがちな女の子が尊重され、自分の人生を主体的に選択することができる 世界の実現に取り組んでいます。

Plan International

Global Hub

Dukes Court, Duke Street, Woking,
Surrey GU21 5BH, United Kingdom

Tel: +44 (0) 1483 755155

Fax: +44 (0) 1483 756505

E-mail: info@plan-international.org

plan-international.org

Published in 2022. Text © Plan International



facebook.com/planinternational



twitter.com/planglobal



instagram.com/planinternational



linkedin.com/company/plan-international



youtube.com/user/planinternationaltv